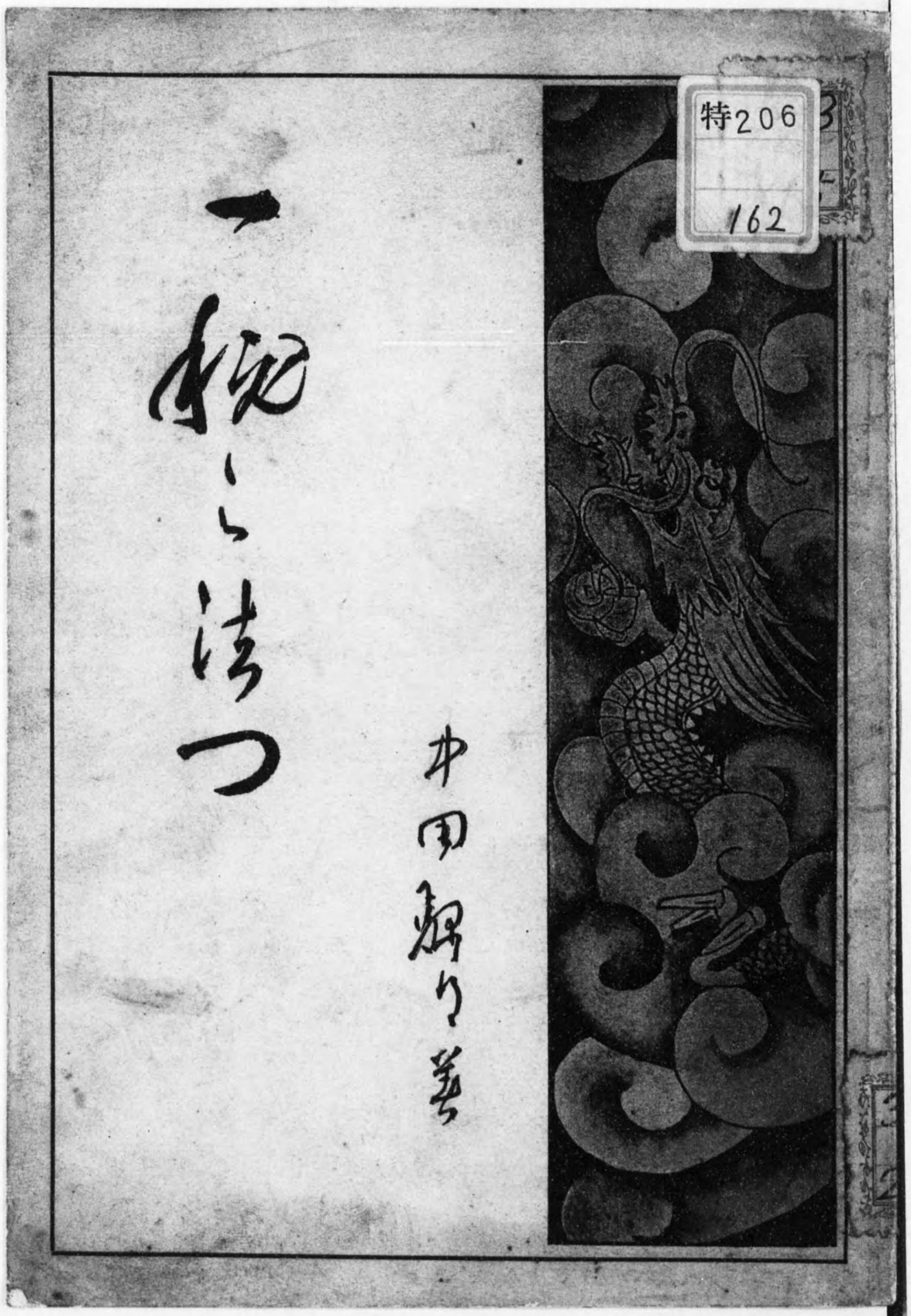

特206
162

始

特206
162

一秘の法門

中田駿郎著

……1930……

清見晴明會編

昭和五年一月 帝國圖書館

序

◇信仰は光りに憧がるゝに始まり、光りを獲るに成る。竪超して天に生るゝを要せず、横超して極樂に往くを要せず。

◇娑婆即寂光土なり。娑婆即寂光土なるが故に――娑婆即寂光土なると共に――即身成佛なり。即身成佛なるが故に煩惱即菩提なり。生死即涅槃なり。

◇光りを憧がるゝに止まるものは、煩惱を厭ふが故に生死を厭ふ。生死を厭ふが故に此土を捨てゝ超出を樂(ねが)ふ。

◇光りに憧がるゝものは光りの中に歩むと雖も、此の如き信心には必ず暗き影を伴ふ。光りは闇に非ず。縱令豆の如しと雖、之を自心に獲たるものは即ち自心の闇を滅す。

◇自心に即して佛心を觀了する時、信心の功德初めて成るを感ず。瓦斯を燃して太陽あるが如く、煩惱を燒いて玆に大菩提あり。煩惱無數なるが故に法味亦無盡――。

◇是の故に吾等は深く煩惱を愛惜す。煩惱を愛惜するに非ざれば、佛魔不二の妙觀と、發迹顯本の大事とを證破し難し。

◇佛陀を信ずるが如く惡魔を信ぜよ。法に對するが如く不法に對せよ。

◇本門法華の妙信に來詣すれば萬法皆生く。

昭和五年中秋

中田騄郎

編者言

中田先生の情理共に調和し、世間行と佛法とを渾然融即せる生活は寔に當代の稀覯である。

私達同志は會の創立以來玆に八年、諄々と敎へて倦まれざる慈恩に浴して來たのであるが、尙不斷にその梵音の如き敎へに親炙したき念願から、從來先生のものされた文章を輯めて小册子を編み、「一秘の法門」と名づけた。

斯樣な計畫は私達がかねての希望で、屢々先生にお願ひしたのであつたが、今回漸く切なる懇請を容れられたので、玆に先生の處女出版を世に送る事の出來たのは實に法悅無量である。

先生の御文章には、いづれもその深遠なる學識と、高潔なる人格と、徹底せる信念とが溢れてをらぬものはない。經濟的方面に於て、政治的方面に於て、社會

的關心事に於て……。身邊雜記の如く書き捨てたものにすら燦然たる珠玉が多いのであるが、それ等は暫く割愛して、今は純宗教的のものゝ一部を輯載した爲に萬朶の櫻の一枝に過ぎぬ憾みはあるが、併し之のみを以つてしても、本門法華の先覺中、獨往獨歩の境地に超絶する先生の信解の輪郭を覗ふには足りると思ふ。

私達は之を聖典として日夕坐右に置いて親しみ、常に反省と精進に資せんとするものである。

當來人生社會の深刻なる苦惱の闇を追ひ退けて、歡喜と希望を載せた黎明の光りは、この小冊子の中からほの〴〵ときさし初めるであらう事を確信するものである。

昭和五年十月二十日

清見晴明會同人識

一秘の法門

目次

信仰に就いて……1
一實の道……9
部分と全體……22
世間法即佛法……30
常識生活と信仰……49
本尊論に就いて……66
一秘の法門……71

一期一会

市田雄

信仰に就て

華嚴經には『信は道の元功德の母こあり』法華經には『以信得入』の文がある。『凡そ佛教に入らんこするもの信を以て根本となし、五十二位の中には十信を本こ爲し、十信の位には信心初め也。設ひ悟無けれごも信心あらんものは鈍根も正見のもの、設ひ悟あるこも信心なきものは誹謗闡提のもの也』こ御妙判にも示されてあります。

人生の常態は畢竟「疑ひ」の集積であります。人を見たら泥棒こ思へこ云へる諺の通り、極端に形容するならば吾々は薄氷を踏むが如く、深淵に臨むが如く常に戰々兢々として暮して居るのであります。釋尊が『而かも今此の處は諸の患難多し』こも『三界は安き事なし猶ほ火宅の如し』とも、又『我れもろ〳〵の衆生を見るに苦海に沒在せり』とも仰せられて居るのが即ち夫れであります。

本佛の活動、三世諸佛の發心の動機は、皆此の人生無常の中に輾轉反側苦しみつづけて居る處の

一切の人類を救ひ、夫れをして安樂を得せしめんが爲めであります。『涅槃を安樂と名づく』『未だ涅槃せざるものには涅槃を得せしめん』とは即ち佛教の歸結が大安樂に存する事を示せるものであります。

安樂の境涯とは即ち無疑の境涯であり、無疑とは即ち信の境涯であります。天臺大師は『疑無きを信と曰ふ』と活釋せれて居りますが、佛教に志すものゝ第一要諦は即ち此の信に入ると云ふ事で、信なきものゝ佛教を論ずる事は、船なくして海を渉らんとするが如きものであります。信には信ぜらるべき對境が無ければ成りません。此對境を稱して本尊と云ひ、佛とも如來とも申すのでありますが、本尊の內容の如何が即ち本尊の力量如何であり、本尊の慈悲と智慧とを現はすものでありますから、世の中に幾多の宗教 佛教の中にも幾多の宗派が存在して居りますが、結局最後の勝利は本尊力の優劣に依りて定まるものでありますから、凡そ宗教を選擇するものゝ最も大事な考へ方は、即ち本尊の有する力用の如何を知る事であります。

本尊の如何が吾々の成佛不成佛如何を支配するものであり、本尊の如何が吾々の理想や智力の程度を定めるものであり、從て本尊の如何が吾々の得べき安樂の大小深淺に重大必然の關係を持

ちます。

も少し進んで申すならば、本尊が偉大でない所に偉大な信仰心は激發せられないものである。本尊が絕對無限の力を有せざる所に、絕對無限の信心は成り立たないものであります。かるが故に淨土門の本尊が西方淨土の阿彌陀佛であると云ふ事を知り得るならば、其本尊によつて與へらるゝ所の信仰も、亦現世娑婆世界に於ける大安樂に非ざる事を知る事が出來、又基督教の本尊が天國の神であり、一般に傳唱せらるゝ如く萬象の創造者であつて、宇宙の外に別存せるものである事を知るときに、其神が地上の靈化を目的とせず、之れによりて惠まるゝ信仰が結局神と一如すべき大覺に至らしめない事を知る事が出來るのであります。

本尊は宇宙の存在であります。殊に我日蓮主義に於ては宇宙即本尊であります。此意味から申しますと、本尊は吾々の外にあるが如く考へられますけれども、深く〳〵考へ詰めて參ります時に其の宇宙を認識する所の本體、其本尊を感得する所の主體は何であるかと云ふ點に突き當ると同時に、吾々の心その物が即ち吾々の宇宙の主體であり、本尊觀照の本體である事が明瞭に分つて參ります。即ち宇宙は我心を通しての宇宙であり、本尊は我心を通しての本尊であり、從て吾々

は我心の上に宇宙を浮べ、我心に即して本尊を感ずる次第であります。日蓮聖人が『己心の佛界を書き顯はして候ぞ』と仰せられたのは正に其の意味なのであります。

乍去、本尊は直に我心ではありません。聖人の仰せらるゝが如く、己心の佛界であります。己心の佛界に即して宇宙の佛界が顯現するのでありますから、己心の佛界顯現の程度の多少に隨て、本尊に對する意識に深淺がある。從て自己の本尊力の大小があります。

信仰は即ち我が己心の佛界を開顯すべき樞鍵であり、信仰とは即ち宇宙の本尊の力によりてのみ己心の佛界は開かるゝものだと確信する我心の働らきであります。

信仰なき所に本尊は現れません。信仰は本尊を映す鏡であります。信仰なき所に佛性は顯れません。信仰は佛性に對する打出の小槌であります。

南無とは驚覺の義也。信仰を得たと云ふ事は吾々に於て驚くべき事實であり、求めて而して之を得たのだと云ふ樣に一應は考へるのであるけれども、併し實は得てから後初めて氣が付いたと云ふ事が、寧ろ本當の經驗であります。信仰は自ら得るものでなく、矢張り與へらるゝものであ

ります。かるが故に、既に信を得たと思ふ刹那、眼前に本尊の御姿が現はれ、此本尊によりて此信仰が惠まれたのだと云ふ事を意識するのであります。信仰と見佛とは一體不二の關係であります。信仰と南無とは同時の事實であります。

信仰は自己の外に存する偉大の人格を知る事であり、自己の中の劣弱な心を觀る事であります信仰は即ち反省の力であります。懺悔なき信仰即ち自己の劣弱、自己の愚惡に目醒めざる信仰は眞の信仰ではありません。

信仰心は即懺悔心です。從て信仰の向上は懺悔の向上であり、見佛と信仰と一體不二の關係にある如く、懺悔と信仰とも亦二而一の關係にあるのであります。

佛とは慈悲心是也。佛の本性は慈悲其物であります。慈なるが故によく勇なり。吾々の心は佛に近づくに從つて、次第に慈悲心を光揚して勇健の氣魄を練成し來ります。併し慈悲心發展の背後には、必ず懺悔反省の力がなければ成りません。大懺悔心の上に打建てられたる大慈悲心にして初めて佛の慈悲であります。信仰が懺悔其物であるが如く懺悔は即ち慈悲の母であります。

信仰は信仰其物に於て佛の愛護の力であると同時に、佛に對する渇仰の力であります。信眼一

たび開けて佛界を見渡す時に於て、我が己身の力の何物もなき事に驚かさるのであります。信仰すら既に自らの力でないとするならば、佛に對する渇仰の力は勿論佛より與へられたものである。卒然として考へ來る時に、吾々は小さき我心に於て自由に佛を戀慕し佛を讃嘆しつゝあると感じて居るのでありますけれども、仔細に觀じ去る場合に於て、信仰の心も亦與へられたものであり、渇仰の心も與へられたものであり、殘る處のものは信なかりし時の醜き我が形骸、信ありとは雖而も尙ほ眞の佛性を開く事能はず、眞の懺悔を感ずる能はずして、動もすれば佛の愛護力に反抗し、佛に對する渇仰力を抑制せんとする魔心の穢れたる働らきのみであります。

併し更に〳〵翻て靜思冥想する時、吾々は佛より與へられたる信心に對して、若し之を妨ぐる所の自己の醜惡なる形相が無かりしならば吾々はどうして其强烈な反省を感ずる事が出來るであらう。若し懺悔が即ち慈悲の母であり、大反省が即ち大愛の動因であるならば、吾々をして佛たらしむる條件は、即ち吾々己心の醜惡でなければ成りません。吾々は信仰を得ると同時に、佛を渇仰する事を知り、自己の醜惡を知る事を惠まれたが、同時に其醜惡夫れ自身の爲めに、更に大慈悲心に至るべき原素を發見する事により、吾々の有する醜惡も亦佛によりて惠まれたるものなる事

を覺知し、法界の偉大なる藝術的、倫理的、哲學的組織に驚嘆する外はありません。

信仰は一方に於ては歡喜其物であります。自己の小さな醜惡な姿が次第に消滅して行く驚くべき人格改造の現證、夫れは唯物史觀の人達の夢想だもせざる精神的經驗であり、恐らくは世界人類が數千年間求め盡した結果、絶望を以て酬いられたる大疑に對する破天荒の福音である所の佛身成就の體驗によりて、形容すべからざる玄妙深絶の歡喜を感ずるに至るものであります。

吾々は法華經の信仰を得たる初に於て夫れが左程の不思議とも驚くべき事とも思ひ得なかつたのでありますが、今日次第に信力增進するに連れ、自分が惡人であればある程、愚人であればある程夫れが取り分けて深き佛天の恩寵である事が染々と感ぜられて、日本第一の果報者だといふ念に打たれずには居られません。

自分の持てる最も大なる不滿、最も强き不幸が、自分の最も大なる喜悅の種であると氣付く事は恐ろしい程深い御佛の大慈力であらねば成りません。最も大なる苦しみが、其儘轉じて大なる歡びとなると云ふ事は、苦しみを逃れて後に安樂を得ると云ふ時間的の觀念ではなく、苦しみのま

丶其處に雀躍の心胸を拓くと云ふ空間的の現證なのであります。生死超越と云ふ事が本當に出來、煩惱即菩提が現身に證せられた時、何と云ふ大自在な心持でありませう。人と生れた事既に世に有り難き運命であります。況んや生れて法華經の信心を惠まれたる吾々の果報の不思議さ勿體なさを思ひ廻らし來りますれば、短かき人生の一瞬時でも忽せに過ごしてはならぬといふ心地が致されます。

一實の道

一、

門松は冥土の旅の一里塚、目出度もあり目出度もなし、と一休和尚は言つた。無量義經に曰く『諸法は本よりこの方空寂なり、代謝して住せず念々に生滅す』と、吾々の眼に見る處の現象は畢竟して流轉の相である、かるが故に佛法に於て形あるものは壞ると言ひ、生あるものは滅すと說く。併し遷滅無常が人の世の姿であると云ふ事は、敢て佛敎の所說を俟つほど深遠な談道ではない。常識あるもの、見る眼嗅ぐ鼻の能く辯別し得る處である。佛敎の要諦は人生無常の理法を知ると云ふ事ではなく、人生無常を諦觀して無常の奥に常住不滅の唯一實相を觀ずる事である。尙一歩進んで之を云はゞ、絕對根元の一法を把握する事である。理窟でも智識でも三段論法でもない。

云はゞ直覺の至純至高の境涯に悟入する事に外ならぬ。佛敎は學問ではない、勿論哲學でもない。哲學は現象界の所產で、其の形式は論理を離れない。論理から人生の眞味を體得せんとする事は、言語や感情の研究から人間の生命や本相を知了せんとすると同じである。或る獨逸人は日本人の腦味噌を解剖して、日本魂とは如何なるものかを研究しやうとして遂に失敗に終つたと云ふ事である。元來本體を知らんが爲めに、現象より入ると云ふ事は是れは非常に重大な迷妄である。此の迷ひが醒めない間は人類は何時までも理窟を以て眞理を求め、恰かも川の水が電光形に流れ行く樣に、唯心論から唯物論へ、無神論から有神論へ、愛の福音から力の福音へ、理想主義から現實主義へ、軍國主義から平和主義へ、斯樣にいつまでもいつまでも同じ事を繰り返へして行くのであらう。哲學では人生は分らない。之れが分ると思つた處に藤村操の最後がある。人生が不可解なのではない、哲學から人生を觀やうとした態度が誤つて居たのである。憐れむべきものである。

西田博士は其の著「善の研究」に於て論理は直覺を生まない、直覺が論理を生むのだ、論理は直覺より出で、而して直覺に歸るべき途中の形式だと云ふ意味を述べ、且つ如何なる偉大な思想で

も其の根元を究めて見れば、悉く皆直覺から出發してゐないものはないと斷言して居る。博士は純粹經驗と云ふ語を以て直覺の名を現はしてゐるが、彼の宗敎の解脫の如きも其の程度の差こそあれ、同じく是れ純粹經驗と名づくべきものである。博士の此の見方は即ち一切の學問は其の所說の內容の高下深淺に拘らず盡く純粹經驗(直覺)の一點より產出せるものであり、彼の無量義經に謂ふ所の『無量の義は一法より生ず』と云ひ『又善男子是の經は譬へば一の種子より百千萬を生じ、百千萬の中より一々に復た百千萬數を生じ、是の如く輾轉して乃至無量なるが如く、是の經典も亦復是の如し、一法より百千の義を生じ、百千の義の中より一々に復た百千萬數を生じ、是の如く輾轉して乃至無量無邊の義あり、是の故に此の經を無量義經と名く』とあるに該當するのである。一法とは直覺の內含的本相である。

法華經方便品に『法は常に無性なり佛種は緣に從て起こると知しめす是の故に一乘を說き給ふ』と云ふ有名な文句がある。法は常に無性なりとは宇宙間の森羅萬象夫れ自身には元、善とか惡とかの性質を具有するものに非ざる事を示されたもので、是れを上來述べ來りし所に照合せば、善惡

は人間の純粹經驗の一刹那一直覺の價値に存すると云ふ譯である。法華經の正覺も直覺である。阿彌陀佛に對する信仰も直覺である。併しながら其の內容の價値は必しも等しからず優劣段々である。即ち玆に、一種子より百千萬を生じとある「一種子」と、百千萬の中より「一々」に復た百千萬數を生じとある「一々の種子」との差別を閑却してはならない。無量義經に所謂「一種子」と「一々の種子」とは共に學者の所謂純粹經驗世界の把住處である。かるが故に人生觀には澤山の出發點がある、無量の直覺がある、低きは地獄餓鬼の直覺より高きは佛陀菩薩の直覺に至るまで。

一休和尙の歌は、法は元來無性なりとの正面的說明である。正月が來たとて門松が立つたとて夫れが何だ、諸法の性には善惡はない、悲喜もない、之を死の方面より眺めたならば、人生は死の姿である、代謝して住せず、念々に生滅するものである。吾人は只管生きん事を希ひ、病めば醫者に走り神に禱るのであるが、之を天地の悠久に比べた時、百千萬億載と雖も夫れは殆んど一瞬時にも値しない、況んや人壽百歲を超ゆるものは稀覯の事、生を樂ひ死を厭ふと雖も、生れて後の人の生は唯死の門に向つて急ぎつゝあるに過ぎない。每日々々の生活は死を小刻みに刻めるものである。吐く息引く息は冥土に走る喘ぎではないか。正月が來て何が目出度い。併し飜つて見直す時に其

處に生々化育の力があり、新々開展の光明があり、無常必しも死に非ず、無常なるが故に生あり、生あるが故に新あり、新あるが故に快樂あり、正月も節句も門松も雜祭りも一として人生の安樂の象徵たらざるはない。目出度いな目出度いな、こう云ふ事になる。

二、

目出たくもあるが人生、目出たくもないが人生、どつちが眞實かと云へば兩方共眞實である。兩方共虛僞かと云へば兩方共虛僞である。二實の道であると同時に二僞の道である。コンナ處に引懸つて居る間は人生は分つた樣で其の實更に分つて居ないのだ。學問で分つた人生は判斷の人生推論の人生で、直觀の人生ではない。外界の現象としての人生で、自己のものとしての人生ではない。要するに悟りの人生でない。一實の人生でない。老子は棄智絕學と云ふ詞を以て智識と學問とを忘却棄絕する處に大道に參する心境があると說いて居る。學と智とを否定するのではない、大道を悟了して而して後、智と學とがあると云ふのである。即ち暫く先づ汝の智と學とを棄てなければ大道に參入する事が出來ないと云ふのである。譬へば學と智とは瓶子に栓があるが如きもの

だ。栓があつては酒の入るべき隙がない、先づ其栓をぬいて見よ、其處に初めて酒の入るべき機會と道とが開けるであらう。酒入りて後栓に本來の用法が見出される、酒を充てざる瓶はドンナ立派な栓があつても夫れは空虛である。學問智識のみあり信仰なく解脱なく悟りなき人生は畢竟空虛であり虛僞である。學問や智識は悟りや信仰と云ふ主君の礙げとして城門に頑張つて居る守衛の如きものだ。

近來哲學が無闇に流行して猫も杓子もプラトーやアリストートルやカント、ヘーゲルを說かなければ人間でない樣に思ふて居る。併し信仰なき哲學悟りなき哲學は、其辯證が高尙になるに從て益々人生が分らなくなる、思索が進めば進む程信仰や悟りの道が塞げられて行く。法華經方便品に釋尊が大智舍利弗の了解をほめて信を以て入つたのだ、汝の智分ではないと仰せられた事を思ひ合すれば、信仰と人間智との關係が炳焉として明かに成ると思ふ。日蓮上人は末法の衆生を皆舍利弗なりと諦觀されたが、自己の智分を恃んで人生解し易しと中途半端な處でエラガリロを尖らして、理屈の有りつ丈を强調する人達の俤が此一語の中に躍動して居るではないか。

老壯の道と雖、棄智絕學して初めて得らるゝ、況んや夫より數等高い我が佛敎に於て、一實の風光を證得するに當つて、智力や學識で能ふ筈がない事は多辯を要しないと思ふ。世上宗敎家が其敎義を說くに當つて、哲學的形式を採るを見て、哲學者が哲學を說くと同一に見做すものがあるのは、識から來る哲學と　悟から出る哲學とを混視せるものであつて、此誤りが取れぬ間は眞の人生に參入する道は開かれるものでない。文明が進めば進むほど世の中は悲慘に成り、人間の利己心が旺んに成り行くに極つて居る。

悟りは棄智絕學して初めて後得られる。而して夫れは永い時間の問題ではない。只ホンの一刹那の事である。主人が城門に入り、酒が瓶中に充たされる間の事である。信仰が科學と一致せぬと云ふ考方は、宗敎を味はぬ者の偏見である。信仰は究竟に於て科學と一致する、又必ず一致せねば成らない。又一致しないで眞の科學はあり得ない。科學者は斯くの如く深く考へて優秀なる宗敎を求め、宗敎家は斯く考へつゝ自己の信仰の價値を反省せねば成らない。この思惟探究の力

が亡びる時偏見が生れる。邪見が生れる。「其力」が強く高く現はれ來る時、正見が起り悟りが起る。人間の持つて居る力、感ずる力の中で科學的思索の力丈けが力であつて、宗教的求道の力は力でないと云ふ筈はない。科學は確定的實驗的で、宗教は迷信的獨斷的だと考へるのは大誤見である。寧ろ夫れは反對であつて、實は科學は何時までも假定的獨斷的で、宗教獨りが確定的であると云ふのが正しい。ニュートンの力學は科學である。而してアインスタインに破られた。原子說は電子說によりて覆された。科學が確定でない證據である。

科學の發見とは結果から原因を推定する事である。原因をまづ發見するにあらざれば確定の意味はない。光線とは何ぞやと云ふ結果を研究してエーテル波動だと云ひ、電子だと云ふ事は科學の分齊で出來る。光りの實現する本體は何だ(原因)と云ふ點に對しては何等の說明をも與へ得ない。宇宙にソウ云ふ力があると云ふ事は唯だ「有る」と云ふ證明を爲し得る丈で、夫れが何故である何物であるかを說明し得ない。宗教は光線を捨て置いて先づ其本源を摑まんとするのである。宇宙不思議の力に參入し體得し行く爲めに開かれた一路である。宗教の解說とは發光體となる事

である。如來力を自己の現身に證明せんとする道である。科學に在りては未來は分らない。未來は未だ現れぬからである。科學の識量の範圍は過去と現在、嚴しく云はゞ過去のみであるかも知れぬ。

ダーウヰンの進化論は科學である。從つて其の適者生存說は過去と現在との實證に過ぎない。未來も亦然るべしとの抽象的論法はありとしても、如何なるものが適者であるか、如何にせば適者たり得るかを具體的には說明し得ない。適者は時代によりて異り、土地によりて異り、文明の程度によりて異る。素より一貫せる適者、不動の適者はない。大戰前には獨逸が適者の如く見へ、敗北の結果不適者の如く見えて來た。併し此後再び適者に見えて來るかも知れない。進化論者に聞いても分らない。夫れは未だ結果が現れぬからである。レーニンは適者ならんとして努力し、世界の脅威と成つて居るが果してどうか。ガンヂも印度で無抵抗主義を高標して精神運動を續けて居るが是も如何？何れも皆適者たらんとし適者たりとの自覺に立つて居るに相違ないが、科學者をして適者たりとの極印を打たれる迄には結果を待たねば成らぬ。

三、

適者となるには甚麼したら宜いか、宗教は其の道を教える。適者とは如何なるものか。宗教は其の意義を說く。思想として適者の意義を說明する方面を教相と云ひ、現實として適者たる境涯を經驗するを觀心といふ。門松は冥土の旅の一里塚芽出たくもあり芽出たくもなしと云ふ事は結果から人間世界を顧みた科學的推論である、進化的見方である。それが純粹經驗として、直覺として働く時に觀心と名づけ、悟りと名づける。純粹經驗は原因にして結果にあらず。芽出たくもあり、芽出たくもないと云ふ二つの材料を並べて推論したものであるならば、一休は迷へる凡夫である。二つの材料を並べて判斷すると云ふ科學者の態度から超越し、其二つの材料の派生し來る根元の一に立脚して人間世界の相對的葛藤を眺める時、其處に門松の歌が純粹經驗の體系的發展として現はれる。一休の歌は二實の道を冷嘲熱罵したのであるが、夫れは判斷でも推論でもない。結果から原因を見たのでもない。實在の一から現象の二を振り返つた形であり、無漏地より有漏地を憐んだ心持である。

禪家の悟りは勿論一實の道である。兩頭を俱に截斷して、一劍天に倚つて寒しと云ふ所に入つて居る。併し夫れは餘りに唯心的であり、自力的であり、理觀的である。一實の風光でないとは云はれぬが、必ずしも究竟の道ではない。一休の歌が判斷を詩化したのでなく、第一義的直觀から流露せる事は言ふ迄もないが、彼れの直觀には著しく理味が現はれて居る。啻に門松の歌計りではない。凡そ一休の歌として言行として人々に膾炙して居るもの、喧傳せらるゝもの概ね皆理的直觀である。是れは單なる一休一人の問題ではなからう。恐らくは禪門を通じて比々皆然るを認めざるを得ない。押しなべて禪家の悟りは、唯心自力なるが故に必然的に夫れが理的直觀となり、必ずしも人生の實際生活と融即しない。又融即するを欲しない。中途半端な禪門者流には比較的常識に適ふものがあるけれども、調子が高くなるに連れて漸次に人生と相背き、雲峰の曠野に特立するが如き形貌を呈する。是禪が倫理道德と渾然一致せず、佛を燒きて尻を炙り、如來を乾屎橛（かんしけつ）と罵るが如き人生の平調と著しくかけ離れた邊を喜び、且つ是認するに至る所以である。

禪家の人に云はしむれば、吾人の見る如きは未だ以て禪の妙趣を解せざる門外漢の言草だと云

ふかも知れない。併し局に當るものは迷ふの譬へ、雲に入るものは雲を見ざるの諺の通り、彼等は禪の傳統的魅力によつて、他に如何なる高き優越せる妙觀あるやを知らず、叨りに自己の悟りに執し、一種の暗示に掛つて居るのである。眞の一實の道はこんな處に彷徨して居て分るべきものではない。事理を超越し、自他を超越し、物心を超越した無上殊特の形貌こを摑まねばならない。禪の悟りの如きは無量義經に所謂一の種子（究竟の一元）には非ずして「一の種子より生じたる百千萬の種子」（第二義の一元）そのものである。第一義諦こしての萬法の根元眞理ではなくして、第二次的直觀の境涯である。素より禪は科學こ異り結果から人生を顧望せる淺薄極まるものではない。所謂棄智絶學して端的に捉へ得た活機であるには相違ないが、夫れが爲めに禪が眞理の絶頂であるこ云へない。

一實の道は科學では分らない。判斷でも分らない。ヘッケルが一元論を唱へても夫れが物心兩面を綜括したものでありこしても、論では一實の道は分らない。トルストイが哲學を捨て宗教に走つたのは、學が人生の直觀に對して力無き事否寧ろ障碍である事を知つたからだ。トルストイは

棄智絶學して悟りを求めたのである。

一實の道は宗教の榜示によるの外到る事が出來ない。併し宗教に段々の相違があり、高下がある。人間世界の巡禮衆は軈て尊無過上の法華經に來るであらう。究竟一實の道は唯だ法華經の榜示によりてのみ示されて居る。

部分と全體

部分は全體であると云ふ事は、法華經に來つて殊に其の然るを感ずる。世間法界の事、若し其の全部を究め了らざれば之を知る事能はずとするならば、人生は永久に吾等の物ではなくなる。佛樣の大慈悲と云はうか、法界の攝理と云はうか、吾等が斯の如き小さい芥子粒の如き軀や、智識や、眼光や、感觸やを以つて、しかも宇宙無限の大法則、實在相を了達する事が出來ると云ふのは、是れ卽ち部分に全體が存するからである。

學問は現象を抽象する。學問は實在相ではない。かるが故に全體の中から部分を抽き出す。實在に於ては實は部分丈けの抽出が出來るものでない。實在は常に一である。二もなく三もない。夫れは恰かも法か一であつて無二亦無三である樣に……。

宇宙に部分があると考へるのは、只考へる丈の事である。頭の上でのみ部分があるとする事が

出來る。客觀的には部分はない、部分は主觀の上の現象である。

學者は心を解剖して智情意の三とするが、心に智情意の三つの部分があるのではない。心には部分はない。心は皆智情意である。實在の心は夫れを幾つに分けて見ても、割つて仕舞つても、皆全體其の物である。よしんば假りに心を捉へて化學的分折法にかけて、百萬千萬のものに分けて見た所で、其の一々のものには皆必ずや智情意がある。心が智と情と意との化合したものだと考へたのは、夫れは實在とは交渉のない學者の頭の上の假定なのだ。

嘲られゝば怒る、損をすれば悲しむ。夫れを人間は感情だと云ふ。勿論感情でないとは云はぬ。併し同時に智と意とが共處にある。人間の如何なる知覺の發展にも、情や智や意力が獨立孤行する場合はない。

部分が全體であると云ふ事は、鳥の啼く聲にも天下の治亂が象徵される事の是認である。日月星宿の變恠にも宰相輔弼の責任が證明せらるゝ事である。或る陸軍中將が佛敎を學びながら、日蓮聖人の立正安國論を攻擊して、彗星の出現が國家謗法の凶兆だと云ふが如きは、科學的智識の

ない爲であると云ふたが如きは、此の人佛教を學び損ねて居るのである。部分が全體である事すら分らなかつた爲めである。

狗子佛性ありと云ふ事は部分が全體である事である。草木國土悉皆成佛の義も亦同樣だ。

同情と云ふ事は人間の美しさであるが、夫れも部分が全體であるが故に存するのである。思ひ遣りと云ふ事がない人に涙はない。思ひ遣りは自身の主觀と體驗とを他人の上に當て嵌めて見た時に起る感じである。思ひ遣りは經驗心理の回向である。自分の心が他人の心であるが故に、他人の泣く時自分も亦泣けるのだ。自他の間に何等の連絡がない所に共通の感情が現はれる筈はない。某甲と某乙との名は異れど、其の本質は同じ人間であるが故にソコに相通ずるものがあるのである。相泣くのは甲と乙とではなくして、只赤裸々な人間としてゞある。人間全體として泣くのである。部分が全體であるからである。

泥棒の心理は泥棒に成らねば分らぬ筈はない。勞働者の心理が勞働者として實際に茶ッ葉服を着た人でなければ分らぬと云ふのは嘘だ。傳教大師や弘法大師は遙々と海を渉つて唐の國に行つたが、日蓮聖人は『千里を渉りて唐に入らずとも一代の勝劣は之れを知れるなるべし』と仰せら

れて其の價値を制限せられた。部分卽全體と云ふ事を知り給ふたからである。

形而下の智識は姑く之を措く。道德宗教哲學の如き夫れ等形而上の智識の爲めに、日本を後にして外國に學ぶ人達に、部分と全體との關係を知らして遣りたい。

今の人は人格が分裂して居る。學問が人間を作ると云ふ誤解と迷信とが、人間をも抽象的にして仕舞つた。曩に既に述べた通り、學問は實在其の物ではなくして、却つて實在を假定したものである。學問が盛んになるに連れて、人間界に理論が流行り出したのは當然の成行だ。理論は必ず假定の上に立つ。確定實在には理論はない。理論は說明の形式である。實在には說明はない。實在はある通りにあるのであつて、說明によつてあるのではない。在る事が分り、在る意義が分つたものには說明は要せぬ筈である。說明は或は分つた人が分らぬ人に云ふ詞かも知れぬが、說明丈の說明は寧ろ迷標である。

學問は全體を部分にする。實在は部分に全體を有つ。かるが故に實在に入るものは部分から全體を知了するが故に、人として動物をも知り、資本家として勞働者を知り、判事として犯罪心理

を知り、批評家として創作家を知る。資本家が抽象的になれば其の同情も理論的となり、勞働者が學問的になれば其の主張は全體としての調節を失ふに至る。兩者が眞の平和を來すのは、只人間と人間との付き合ひをする時でなければ成らぬ。資本家とか勞働者とか云ふ事は、只だ概念である。人間其物ではない。人生には人が獨り實在である。資本家も勞働者も、甲某も乙某も共に名であり衣であり、形式であつて眞の實在ではない。人生は獨り人である。人の部分が人の全體であるが故に、資本家も勞働者も諧和して行けるのである。池の水と川の水とは水として實在である。池の水川の水としての實在ではない。それは水の名であつて實ではない。水の衣であつて體ではない。水と水とは其堤を切る事に依つて實在の本然に還える。其處に池の水もなく川の水もない。諧和協調の一路は其の間の堤を切る事である。

水は池にあるも川にあるも、本と其の本性に變りはない。堤が夫れを分けたが爲めに人間の頭の上で假りの名がソコに出來た。池の水、川の水……併し夫れは人間の假定である。實在は人間の假定の爲めに其の本質を變じない。人間が假定の爲めに其の觀察を間違へたのだ。學問はいつ

でも假定である。かるが故に學問は實在に名と衣とを與へて全體を部分付ける。學問を知る事が人生を知る事だと考へた人達が、學問の方に巡禮して長い旅を續けて居るが、何ぞ計らん殿堂は東に在り、彼等は只管西に向つて急いで行くのだ。學問が全體を部分付ける爲めに巡禮の心も亦部分付けられて、其の所に人格の分裂が生じる。政治家に道德なく、經濟學に倫理なく、愛に敬を失ひ、藝術に純を亡ぼす所以のものは、全體が部分となつた結果でなくて何であらう。

吾等は學問を尊重する。併し實在を尊重する事は夫れよりも強い。『本立つて道生ず』の古諺の通り、『臨終の事を習ふて後他事を習ふべし』の聖訓の通り、吾等は本末を正す事を忘れては成らない。學問丈けが無上の尊嚴となつて、宗教や悟りや夫等實在の觀念思索が忘れられる世界には人間としての生活が亡びて、名や、衣や、假定や、形式や、抽象や、理論の生活のみが殘る。同情もなく純眞もなく、道德もなく、潤ひもない世界のみが現はれる。

命あつての物種と云ふ、吾等は先づ命を惜まねば成らぬ。心あつての命である、吾等は先づ心

を愛さねば成らぬ。心が智情意の化合でないが如く、心が幾千萬粒に分割されても、其幾千萬粒の一粒毎に同じ智情意があるが如く、吾等の有つ所の心其の物は幾百億人に分有せられて居ても夫れは盡く一實在の表現である事に氣付かなければ成らない。吾等の心は全體其の物であつて、部分ではないと考ふる事が悟見である。部分であると考へる事が迷見である。吾等の心が卽ち佛の心であると覺醒する所に宇宙の佛の一大靈魂界の莊嚴が現前する、宇宙は宛然として一佛の全體であり、吾等は宛然として一佛の部分であり、而して兼ねて一佛の全體である。佛に對してひれ伏す『我れ』の迷へる姿を見よ、佛に對して仰ぎ登る『我れ』の開け行く心を見よ。信心は唯部分心より全體心に還える旅路の杖である。學問の迷津から實在生活の彼岸に涉る海路の船である。吾等は命を惜しむが故に心を惜しみ、心を惜しむが故に佛を惜しみ、佛を惜しむが故に法を惜しむ。吾等は法の前には佛を捨て、佛の前には心を捨て、心の前には命を捨て、命の前には財寶と學問とを捨てねばならぬ。學問を捨てる事は軈がて大いに之を拾ふ事である。老子には棄智絕學と云ひ、佛敎には我不愛身命但惜無上道と云ふ。命や心を大いに得んとするものは先づこれを捨てる事に急がねば成らない。佛敎の道は不惜身命と、質直意柔輭とを本とする。徒らに命を惜しむ

人と、徒らに己心を恃んで讓らざる人とは信仰に入る事は出來ない。佛の大實在の前には吾等の命や小さい心の部分に執着して居てはならない。部分を捨てる事が卽ち部分を拾ふ事である。吾等は只信によつてのみ部分を全體と爲し得る。

世間法即佛法

一、

宗教の學問が進歩した今日に於いては、信仰が人生活動の現實の上の問題であると云ふ事は、可なり廣く理解されて來た樣である。

併し私共が好んで青年客氣に任せて信仰を放談高論した時代に於ては、信仰は安心立命の爲めに存するものだと云ふやうな處に目安を置いて居たものであつた。

私共は禪宗の高德の物語などを聞かされる度毎に、學得と見得との區別に就いて非常に迷はされたものであつた。絶對と云ふ名、絶對と云ふ解釋が比較的ハツキリと私共の心持に分つてゐるのに拘らず、禪の和尚達に云はせると、ソンナ理屈は駄目なのだ。ォ前達は學問に煩はされて端

的に物事を見ることが出來ない、佛教はソンナ迂遠な邊にはありはしないと……。

私共は理論上でやゝ和尚の云ひ草が分つた樣な氣がして居た。併し當時私共が好んで禪を論じて隻手の聲がドウの、寶鏡三昧がドウのと盛んに生嚙りのヨタを飛ばして得意がつて居た時分は、實は殆んど何んにも佛法と云ふ事が分つて居なかつたのであつたと今思ふのである。

當時私は禪は一種の皮肉共のものゝ樣に思へた。或る和尚と話して居る時、私が世の中と云ふものはうるさいものですね、と云ふと其の和尚はすぐに、うるさいのが世の中なんだよと來た。こう云ふ事を禪家では一本參つたと云ひ、參禪の人達は參らされたと心得たものであつた。禪は一種の揚足取りだなと考へたりした。

或る大政治家で、禪に凝つて居る人が（尤も其の人は野狐禪だと云はれてはゐたが）或る時隅田川へ銃獵に出掛け誤つて川舟の横腹へ銃丸を打ち込んだ。船頭が眞赤に成つて怒つて來た（コレは怒るのが當り前であるが）船へ當つたから宜いがもし人間に當つたらドウする。之れに對する大政治家の答が禪なんだ相である。曰く、船へ當つたから宜いナラそれで宜いではないかと。

私達はコンナ事が禪の妙用であると感心したものであつた。此頃でも犬養さんなどの云ふ事が時々新聞などに出る處を見ると、皮肉や揚足取りの連發で痛快極まるものがあるが、昔はコンナ事が大人物の大人物たる所だなどと考へて、俺もエラク成つたら、アンナ理屈や揶揄やを無闇矢鱈に飛ばして、俗人共を驚かしてやらうなどゝ意氣込んで見たりしたものであつた。

青年客氣の時代には威勢のいゝ坊さんが好きでヨタを飛ばしたり、痛烈骨をさす樣な惡罵を浴びせたりするやり方を無闇に喝采した。禪が必ずしも皮肉と痛罵の宗教では無いけれども、悟りも何も分らない理屈一點張りの人間に取つては、何でもキビ〳〵したやり口をする樣になる事を理想とし、宗教と云ふものを其の方面に計り求めたものである。

世間法即佛法と云ふ事は、其の名を聞く事は隨分久しいものであるが、禪の世間生活と、念佛の世間生活とには、外形上著しい相異があるし、佛法を學べば世間の事が分る樣に成ると云はれても、唯だ夫れ丈けの事では何の事やら要領を得る事が出來なかつた。

日蓮上人の信仰に救はれて、十數年の體驗生活を經てから、信仰と云ふものに對する考へ方も

大變違つて來、昔し聞いた處の學得と見得との區別も、ドウやら付いて來た樣に思はれ、從つて世間法即佛法の意味合も、朧氣ながら解されたではないか位に成つて來た。

二、

世間法即佛法と云ふ意味が本當に分ればエライものである。私だからと云ふて生意氣に知つた振りをして、エラ相な事を並べて見るものゝ、夫れが果してドノ程度迄佛樣の御思召に適ふて居るものやら、トント見當が付かないのである。併し禪宗の六祖の慧能と云ふ人は目に一丁字もなき無學者であつたけれども、或る亭長の奥方か母御か、兎も角も當時有名な涅槃經の教學に習熟して居た優婆夷に對して、其の信じ方の誤りを指摘し、涅槃の眞諦を說示したが、其女性が驚いて其の所以を問ひ糺した時、慧能は、佛教と云ふものは文字の講釋や理屈で分るものでは無い。深く其義を呑み込めば、文字上の事は自づと分るものであると、答へたさうである。

日蓮上人は『學とは無智也』と、法華經の會座に集つて居る學無學二千人の條りで活きた判釋を與へられて居られるが、近代の文明を達觀するに迫んで、私共は末法の世の人には、學愈々進んで智いよいよ昧くなりつゝあるの感が深い。

末法は、一切經の總要南無妙法蓮華經の五字七字のみの流布する時である。智分によらず唯信得入の機であると云ふ事を思ひ合はせると、『學とは無智也』と云ふ御妙判の中に、甚だ玄妙深絶な意味合、有り難味、頼もしさが含まれて居るやうに思はれる。

學とは無智也と申す事は、今の文化人に取つて甚だしい侮辱に聞える。併し六祖慧能が、無學文盲にして、禪の眞諦を味得し、學匠達を睥睨した事を思ふと、本當の智慧と云ふものは、學問で獲得し難いものである許りでなく、信を餘所にして、唯學問に許り猛進するものは、其の進歩が多い程、眞智に遠ざかり行く事が肯定されるやうに思ふ。

私達は先づ自分の小慧しい分別を捨てゝ、無條件の信心に入らねば駄目である。理屈や、講釋や、ソンナ小さな我見を離れて行く所に、佛様の持つと等しき心持ちがボツ〳〵と開けて來る事

を感得する。

佛様の持つ心持、是れが即ち眞智、又は本地の風光であり、最も完成したる世間法の境界である。知らぬが佛と云ふやうな、通俗卑近な佛の概念に誑らかされて、佛様と云ふものは、世間の事に昧い雲の上人の様なものだと考へ去ると、夫れは大變な誤解である。

佛様に成れば成るほど世の中の事が明るくなるので無ければ、夫れはニセの佛様である。

三、

世間と云ふものは心廣く體ゆたかに、生活安穩、壽命長久、子孫繁昌と云つた様な事を目標として居る。禮讓とか、親切とか、平民的とか、普遍的とか云ふ事を常態とし中味として居る。佛様ほど親切な、優しい、平民的な、普遍的な、いつも變らぬ平和な心持と、禮讓と謙虚と、反省と宥恕と、思ひ遣りとを持つて居るお方はあるまい。佛様は鳶掘摩の如き、殘虐無道の人をも許されるし、提婆達多の如き惡逆に對しても、親切誘導の心を忘れ給はぬ。

佛を得ると云ふ事は、佛様の有せらるゝ此の偉大な完璧な、玲瓏たる心持を得る事である。佛

法を學んで仲たがひをしたり、法華經に歸依する事深くなるに伴ひ、今迄親しくして居た友達と離れて仕舞つたり、甲の師匠を信ずるが爲めに、乙の師匠の弟子共とは一緒に成れなくなるなどは、世間法即佛法の妙法蓮華經とは違つた題目の修行者でなければ成らぬ。

例へば法華教徒は、法華教徒として異體同心水魚の思を爲してゆきたいと云ふ事はよく聞く詞である。お祖師様も『異體異心なれば大事を成ぜず』と云はれ、極めて痛烈に同心共力を激勵されて居りますが、抑々此の異體同心と云ふ心持からが一つ間違ふと祖意に對し、非常な不孝を釀す事に成るのであつて、もし通例考へられるやうに、是れは法華經徒のみがお互に相援引し、兄弟のやうな水魚の交りをして行く事であると解するならば、夫れは本當の考へ方で無いと思はれるのである。

法華經に『今此の三界は、皆是れ我が有也、其の中の衆生は悉く是れ吾が子也』と仰せある深意を伺ひ奉れば、法華經の仲間丈が水魚の思を爲すのみに止まらず、一切衆生――夫れが惡人であらうと、他宗門であらうと――皆悉く我が兄弟の思を爲して行かねばならぬと云ふ事ではあるまいか。若し夫れ他の宗門の人達が、我見に執着して我が佛ケ尊しと獨斷し、他の宗派を異端と罵り、之れを排斥せんとするの行ひを爲し、一種の修羅道を現出し居る中に立ち、如是鬪爭の地平線より超出し其中衆生悉是吾子の熱禱を捧げ續け得るものはあらゆる宗教の中に於て、唯だ獨りわが本化妙教の使徒達のみである。他の宗教は、外道外典は申すに及ばぬ事、內典の佛教と雖、華嚴般若の如き、進んでは天台法華の玄妙深絕に至りても、尅實して之れを論ずる時は、皆是れ理上の談であつて、決して事實上の力用あるものでは無い。彼等は理あつて實なく、言あつて功德なく、教行あれども證りなき迷界の分際である。佛様のお心持を掴んだと云ふても、實は本當に掴んでは居ないのだ。從つて口や筆には和合を叫び大慈大悲を唱へ、先業懺悔をものすれども、いざ鎌倉と云ふ時は、臆病武士が平素の廣言ドコへやら、逸早く逃げ出すと同じやうに、鬪爭と、殘忍と、破戒無慙の本性を現はす。

法華經の中でも、本化の實證せられた事の一念三千の信心に至つては、全く以て正眞正銘の事の一念三千であつて、之れを信じて退轉せず、受持し通す時んば、一切無障礙の心境を開き、大

懺悔の蓮華の座に、大慈悲の姿を現ずるに至るのである。

日蓮の弟子等は、異體同心でなくては成らぬとの仰せは、即ち他宗門の如く、口に勿體ぶつた事を云ひながら、心に三毒を懷くが如く表裏反覆に非ずして、佛の見そなはし給ふ如く、一切衆生を――一切世間を無差別平等の心鏡に照らして行かねば成らぬ。此意味において共力せよ相背く事莫れ、と嚴誡されたのが、取りも直さず異體同心の御妙判であると信じ奉るのである。

四、

日蓮聖人の宗教で一番大事な事は唱題修行であらう。勿論本尊に對する意識も大切な事であるに相違ないが、吾等の實際問題として、眞つ先に考ふべき必要は、本尊觀よりも寧ろ唱題の意識に存する。

唱題を佛法的に解釋するのと、世間法的に考へるのとあり、世間法即佛法的に考へるのである。是迄の唱題論を見ると、所謂身口意の三業の中に就いて、口唱を以つて正面の修行と立てたものであつた。併し此の考へ方には屢々誤解を生じ易いものがあると思ふ。勿論吾等とても、口唱を

疎かにして宜しいと云ふ譯では無いが、より多く身唱、或は色讀に中心を置くべきものである事を高調せんとするものである。

日蓮聖人が日朗上人に與へられた有名な土牢御書にも明らかに示されてある通り、法華經は、口でよむよりも、心で讀むべきもの、心で讀むよりも、身で讀むべきものである。

法華經が色讀第一である如く、題目は身唱を第一とすべき事、洵に明々白々であるけれども、從來此の點が甚だ閑却されて、口で唱ふる題目計りが巾を利かして居たのは、如何なる理由であらう。先輩方の御論を拜見しても、割合に不明確なのはこの法華色讀の意義である。

或る先輩は云ふ、法華色讀と云ふ事は、お題目を唱へる時の心持を以つて世間の仕事に當る事である。即ち唱題の場合に於ける吾人の精神狀態は純一無雜であつて、胸中唯だ佛陀戀慕の至情あるのみ、此の心持を日常生活に轉活して、純一な明朗な調子を以つて人に接し、事を處理するならば、是れ即ち法華を色讀し、題目を身唱する所以であると。

乍去、吾等が御題目を唱へて居る時の心持が純一無雜であると云ふ事ほど實際とかけ離れた見方はあるまい。私自身の經驗を有りのまゝに告白するならば、唱題によつて心境が澄徹して來るに

從ひ、種々の雜念が雲の如く湧き起るを禁じ難い。借金の事、試驗の事、事業の計畫の事、選擧の事、女の事、男の事など、職業により境遇に應じ、時と場所とに依つて夫れ〴〵異つた雜念が激しく往來する事、夢中生活に於いて色々なラチもない妄想が現はれ來るのと同じである。唯だ夢中と異る所は、彼れは多くは取り留めも無い事ばかりなのに對して、是れは割合に論理的に繰り出されるの相違がある計りである。從つて、唱題の心持を以て世間の仕事に從事せよと云ふ說明では、事實にかけ離れた極めて抽象的のものに墮ちて了ふのである。

或る學徒の誨ゆる所によると、色讀とは朝夕の勤行共ものである。就中其の勤行の意識の中に必ず、日本帝國と、寶祚の無窮とを織り込んだ祈願を持つを肝要とする。即ち正當なる本尊を勸請し、正當なる觀念を以つて、朝夕に唱題するを法華色讀と云ふのであると。

此の考へ方ほど色讀の觀念を形式化したものはあるまい。吾等は勿論、朝夕の唱題禮拜を肯定するけれども、是れを以つて色讀とするの說には左袒し兼ねるのみならず、もし色讀と云ふ事が口唱の形式化であると云ふならば、身に讀むを以つて第一義とせられた日蓮聖人の深意は、全く

何れへか置き忘れられた譯である。或は此の論者は唱題の意識の中に織り込むべき條件を八釜しく論議して、普通の唱題禮拜とは同一で無いと强調するかも知れないけれども、こう云ふ事は少くとも日蓮聖人の御書の中には御示しに成つて居ない事であつて、後世の一部の學匠達の獨斷に過ぎないのである。

五、

法華色讀と云ふ事を抽象的に申すならば、題目を本質的に日常生活の上に實現すると云ふ事である。題目を本質的に體現活用すると云ふ事は、徹底せる意味に於ては不能を强ゆる事に該る。何となれば、題目を本質的に活現すると云ふ事は、行者自身の行滿ち、罪滅びて、即身成佛の妙境を獲得した後に非ざれば出來難い事であるからである。私が『抽象的に申すならば』と豫め斷つて置いたのは、其の爲めであつて、吾等凡夫の修行としての唱題意識の上には、今少しく可能的な考へ方を選ばねば成らない事は申す迄も無い。

私の經驗によると、吾等の成佛の關鍵としての唱題は、口唱よりも著しく身唱の上に、大力用

を感得するのである。殊に私の如き劇務多端、屢々寢食を廢するやうな生活人に取りては、朝夕の唱題禮拜と云ふが如き、形式の行軌が怠り勝ちに成り、或は車の上、或は仕事の途中、腹の中で默唱する位で、幾日も幾日も經過するのが珍らしい事ではないのである。

若し朝夕の唱題禮拜を以つて、正意とすべきものならば、所謂、有產階級、有閑階級、不勞階級の人達こそ最も早く成佛すべく、俗人よりも出家の方々こそ、より多く罪障消滅が出來る譯であるが、併し我が日蓮聖人の御妙判に從ふ時は、末法は鬪諍堅固の時で最も複雜を極めたる世であるから、山林に交つて行ひすますべきで無い。刀杖弓箭を持し、巷に立ちて折伏を行ずべきである。即ち山の佛敎が亡びて、巷の佛敎が興り、僧侶階級の手から俗人の手に、眞の敎權が移動すべき時が末法そのものであると考へられた。

末法は謗法逆惡の世なりとは云へ、法華經流布の時であるが故に、功德回向の利益は、正像二千年の時代に對し比ぶべくもないほど、大きいものであるとされた。所謂正像に生れて王者となり大名となるよりも、末法の世の癩病患者であつてほしいと力說せられたのは、即ち末法惡世の本質が、正像時代の本質よりも優れて居る事を諦觀せられたからであらねば成らぬ。

本化の聖眼に照せば、逆謗の時代こそ、殊に感謝し安住すべき常寂の都である。かるが故に女人成佛があり、かるが故に提婆成佛があり、又二乘闡提の成佛がある。

煩惱即菩提なるが故に、罪いよいよ深くして、菩提の味いよいよ濃く、生死即涅槃なるが故に生死の苦いよいよ烈しくして涅槃の樂いよいよ饒い。

唱題の第一義は罪惡を觀ずることから初まる。罪を知るものは即ち救はれたる人である。貧しきも罪の故、病むことも罪の故ぞと、我身の過去を觀じ來る時、大聖人の仰せられた如く、現在の果を見て過去の因を知り、現在の因を見て未來の果を知る事が出來るのである。

貧しきは罪なりと考ふる事は、罪は救はるゝもの也と考ふる事によつて、苦しみより轉ぜられる。信心は佛陀の救濟に對する確信である。信心一たび生ずる時、貧しき現身は直ちに富めるものと成る事は出來ないけれども、富めるものの持つ事の出來ない感謝と安穩とを與へられる。

罪は決して身の貧しき所に存するものでなくして、心の貧しき所に存するものである。大聖人は『藏の財(たから)よりも身の財すぐれたり、身の財よりも心の財第一也』と仰せられたが、私共は此の御妙判を轉じて、藏の貧しきを必ずしも罪と名づけず、身の貧しきを罪と名づく、身の貧しき未

だ必ずしも眞の罪には非ず、心の貧しきを眞の罪と名づくと云ひたい。

大聖人は、貧窮下賤の家に生れ給ふたが、佐渡の雪中に在つて『日本第一の富める者也』と仰せられた。

四ケ度の大難、小難は數を知らざる御生涯も、大聖人の徹底せる罪障觀の前には、唯だ歡喜法悅の莊嚴世界であつた。知恩報恩が法華信仰の表面なりとせば、知罪滅罪は其內核で無ければ成らぬ。

六、

佛性開顯は唱題の功能であるが、佛とは慈悲心是也と云ふに對して、私は佛性とは懺悔心是なりと思ふて居る。從つて佛性開顯とは懺悔心の控發であり、懺悔心の控發は必ず罪障觀を前提とする。信仰の上に罪を知る事は、『地獄で佛に逢ふ事』である。地獄が分らぬものには佛は分らぬ。有り難味も分らぬ。罪を知る事は取りも直さず佛を知る事である。

茲に所謂信仰の上に罪を知ると申す事は、自己の小さな人間智を以つて觀照せる智惠と云ふ意味と違ふのであつて、佛樣によつて示された罪の存在の意識と云ふ意味である。

佛界緣起の法門とは、一切の社會現象が盡く佛樣より緣起し、佛樣より遣はされたものと云ふ教であるが、是の教を現實の上に觀じ來る時、私共は、私共の小さな智解に於ては、如何しても解し兼ぬる所の澤山の矛盾を世間の上に感ぜざるを得ないのである。

富めるもの必ずしも正しくない。不正なるもの必ずしも不幸でないのみならず、却つて正義人は迫害せられ、持戒者は衣食に窮し、彼の人生の表に翱翔しつゝある得意滿面の人達の多くは利己殘虐不義の徒ばかりである樣に見える。從つて若し佛界緣起の法門を、人間の智惠の上で解釋する時に於ては、佛樣の世界ほど、佛樣より遣はされた出來事程、不合理極まるものはないと云ふ事に成るのである。

併し佛樣の存在は、儼然として太陽の如きものがある。我等の罪身も亦否定し難き現實であると氣が付いた時、佛樣の世界が不合理に見え、矛盾に見ゆると云ふ事は即ち其の之を見るものゝ眼力の不合理である事に氣付かなければ成らぬ。

信仰の進歩と云ふ事は、即ち世間の矛盾の次第に消却せられてゆく事である。世間は表面に於いて矛盾であり、矛盾であるが故に森羅三千である。此三千の差別が佛様の一念に統攝せられ來る時、（否本來統一されて居るのであるが）無量の不合理は一躍して條然たる眞理界となるのである。吾等の信心決定して人法一如する時、生佛一如する時、世間法即佛法となり、佛の一念即ち吾等の一念と云ふ一體不二の妙境を證得する。

私が信仰の上に罪を知ると申した事は即ち『矛盾の上に苦身を感じ、苦の上に罪身を感じ、罪の上に過去身を感じ、過去の罪因を感じ、現在の罪果を感ずること』云ふ事である。

矛盾は實は世間の姿ではない。直ちに自己の姿である。自己が即ち世間である。世間に現はるゝ矛盾の姿の故に自己の矛盾を感知する事が出來る。世間は畢竟自己の照魔鏡であると云ふ事が本當に分れば、世間の一切の緣は佛様から遣はされた緣であると云ふ事が了解せられる筈である。

繰り返して曰ふ、世間が不合理では無い。自己が不合理なのである。世間に苦勞が多いのではない。自己に苦勞が存するのである。苦は即ち自己であり、苦を感ずる事が罪である。吾人が信

仰の上に苦惱の緣を與へらるゝ事は、佛様の化導の力が吾等の罪身、吾等の過去身に對して、働き續けて居る事である。

苦の緣いよ／＼滋くして、佛恩いよ／＼深く、罪に對する感覺もます／＼瞭然となつて來る。人間智を以つて量る所の罪過の感覺は生れて以來の短かい月日の出來事である。而かも人間は、多くは自己の罪を感じ難く人の過ちのみが眼につく、信仰の上に罪を知れば、一切の世間の矛盾と不合理と、一切の自己の苦惱と煩悶とが盡く知罪の緣となり、斯くてこそ懺悔も大懺悔となり、反省も三世に通じての深みを持つ。

懺悔の故の唱題なるが故に、唱題は決して口の上、御本尊の前丈けのものでは無い、却つて日常生活の世間行の上に、著しく唱題の大力用を認めざるを得ない。佛性とは悔懺心是也と思ふて居る私は口唱の功德にもいや增して、日常生活の活社會の大多忙、大混亂、大苦惱の中から、行住座臥の唱題の利益を發見する。

懺悔の心强盛なれば、布施の力も亦强く、忍辱の力も亦强い。懺悔あるが故に禪定不動の信念力を得、持戒力も亦旺盛になつて行く。

菩薩六度の修行は、必ず大懺悔を基本こせるものでなければ成らぬ。六度の修行は事の一念三千、佛界緣起を了解せる大罪人の懺悔を基本こする時、直ちに夫れが法華色讀、題目身唱こなる。

私は、尙澤山の書くべきものを持つて居るが、餘り長くなる事を恐れて、此の邊を以つて一ト先づ本稿を了つて置く。

常識生活と信仰

一、

大奸は忠の如し大詐は信に似たりと云へる諺の通り、邪惡の思想も深い處に入つて來るこ容易に眞理この異同を甄別されないものである。法華經の絕對高處より高飛車な批判を加ふるならば彼の一乘究竟の極說こ誇稱せる淨土敎の如き、又天下の眞理そのものゝ如く、宣傳しつゝある耶蘇敎の如き、是等は邪惡思想の最も深邃なる邊まで入つて居る敎理信仰である。

常識から云はゞ信仰は善であり、盜みや騙りは惡である。ナンボ耶蘇敎や淨土敎が法華經に比べて低級だこ云ふた處で、天下の惡者の親玉であるが如く云ふのは、餘りに氣狂ひ染みた沙汰ではないか、こ云ふ樣な疑問が湧き出す。是れは寧ろ我等の常識生活の中に於ては疑問でも何でもな

い事に考へて居るのである。泥棒をしては悪いが、信心をするのは善い。アノ人は誠に結構な人だ、信心者だ、信心をすると云ふ事は或る意味に於ては人格者たる事の測度計である。然るを信心と雖も盗みや騙りに劣るものあり、耶蘇教是なりと云ふ人ありとせば、是れは人生に對する偉大な反逆であり、取るに足らぬ寝言である如く見ゆるのである。併し夫れは反逆でもなく、寝言でもなく、囈語でもない。之れは最も厳粛な高等批判としての鐵案である。

元來思想の分判と云ふが如き大事が、常識を以つて出來るものと考へる事からが、抑も大なる迷妄であつて、吾々は常識を以つて如何にも穩健な人間的な、共同生活に適したもの〻如く思ひ做して居るけれども、何んぞ圖らん、常識ほど階段のあるものはなく、掴へ處のないものはなく、意義の徹底せぬものはない。世人は常識に對して餘りに概念的であり、注視力が稀薄である。若し斯くの如き態度が常識的であるとするならば、常識はボンヤリしたものだと云へる。常識は見詰めれば見詰むる程ありかの分らない代物である。信仰や悟りが常識を高めて行く事はあるが、常識から信仰を判斷すると云ふ事は大なる顚倒見であらねば成らぬ。

信仰が常識と背馳する事は誤つて居る。併し現在吾々が持つて居る常識を保存して置いて、最勝なる信仰の境涯と一致せしめ様とする考へ方は更に大に誤つて居る。

信仰の是非勝劣は常識から見るべきものではない。同時に現在の常識は未來の常識ではない。現在とは凡夫と云ふ事であり、末來とは佛と云ふ事である。

吾々の意識する常識なる觀念は練磨せられざる凡心の分齋である。百人に百人の面がある如く百人の心がある。百人の心とは百人の常識と云ふ事である。若し主義や利害や愛慾好惡を以つて相去就せしむるならば、百人盡く其の行き方を異にし、其の好みを異にする事も有り得ぬとは云はれない。是れは即ち常識に定型なき證據である。常識とは個性の直觀と云ふ事であつて、個性の大多數が墮落すれば常識も亦墮落し、夫れが向上すれば常識も向上する。堯舜の民の常識と盗跖の民の常識と著しく違ふといふのは、其の個性の價値が押しなべて違つて居るからである。

近代政治は多數政治だと云ひ、民意尊重の政治だと云ふけれども、之れは常識政治と云ふ事である。政は正也と云ふ根本義を、迷ひに充滿せる個性で直觀して行かうとするのである。信仰を常識で批判するのと同じ行き方である。常識で正義は分らない、從つて常識で政治が分る筈がな

い。

二、

今の人達は政治を說き宗教を說くと雖も、其の根柢にはいつでも常識が働らいて居る。信仰を求め理想を求めるときも、其の背後に常識の羈絆を脫する事が出來ない。骨が邪魔して痩せられぬと云ふ俗諺があるが、彼等は常識が障碍に成つて、道に至る事が出來ないのである。

彼等は現在の常識に惱まされて居る、現在の常識を捨てて仕舞はなければ彼等の天國は來らない。彼等は天國の常識を求めず、常識の天國を論じて居る、雷が鳴つても聾には聞えない、太陽が照りつけても盲人には見えない。彼等は常識を以つて耳を塞がれたる聾者であり、目を蔽はれたる盲人である。天國は彼等の眼前に在る、彼等は先づ其の遮蔽を取らねば成らぬ。彼等の遮蔽とは煩惱であり罪障である。彼等は先業の力により常識と云へる罪障に惱まされて居る。罪は自己に都合の宜い事や、自己の美點や、自己の偉い所や、ソンナ事を考へる所の心持であり、又自己の醜點を巧みに隱すべく働らく智惠であり、又他人の缺點をのみ鋭く瞶める眼力で

ある。

罪を消すと云ふ事が常識を捨てると云ふ事であり、常識を捨てると云ふ事は自己の醜點のハッキリして來る事であり、而して他人や世間の强點、美點、有難味が感得されて來る事である。

感恩の思想と云ふ事は常識では統一されない。常識上の感恩は心ずや打算的であり、交換的である。感恩の歸結は報恩であるが、報恩の眞價は大きな標札を立てゝある豐川樣の寄付金の中から發見する事は出來ない。常識上の報恩は標札に書いて在る。人に知られない報恩に價値が在ると云ふ事は、彼等の常識の肯定せぬ事である。現在の常識はころんでも只は起きぬと云ふ事である、彼等は知恩報恩をも常識から考へる。

歐米の思想は常識の上に築かれて居る。常識とは人間の有りの儘の心持である。練らざる時は金も鑛であり、磨かざれば玉も璞である。あらがねの儘の人心を根として人生を考へる時、法界は本能の集積である。玉磨かざれば光なし、光明の世界は切磋琢磨を要する。『鐵は鍛へ打てば劍となる、聖賢は罵詈して試みるなるべし』と御妙判にある通りである。而も歐米の思想は全く

之に反し、滔々として官能生活に溺れて居るのは如何なる譯であるか。基督教徒は是等の風潮に對して、是れは近代に至りて勃興せる智的啓蒙の結果である、科學發達の所産であると强調し、基督教徒は少しも是等の風潮に染まざるものゝ如く宣傳して居るけれども、吾等の所見を以つてすれば、歌米人の官能生活は基督教の力の缺けた處から發達し來つたものである。官能生活は基督教の外にはなく、内にあるのである。

歐米人の思想の出發點は、自己本位と云ふ事である。神を見るにも自己を本位とし、倫理を說くにも自己を本位とし、產業や政治を考へる時にも自己を本位とする。彼等は物質上に於いて自己を本位とする如く、精神上に於いても自己を本位とする。彼等の無神論が自己本位の無神論である如く、有神論も亦自己本位である。マルクスも自己の都合を出發點とし、トルストイも自己の都合を出發點とする。

彼等の經濟學は如何にせば最も少ない勞力費用を以つて、最も多い價値を生產し能ふかと云ふ事を研究する。彼等は此の如き考へ方を稱して、最大多數の最大幸福の根蔕と思惟して居るが、

夫れが自己を中心として居るが爲めに、今日の如き資本反抗の惡思想を醞釀し來つた。

彼等の倫理は彼等の經濟學の如く、自己を本位として居るが故に、如何にせば最も少ない親切を以つて、最も多い感謝を受ける事が出來るかと云ふ事を考へて居る。日本人は動もすれば我が國民の表情に拙なる事を嘲けるけれども、表情に巧みだと云ふ事は、自己を實質より善く見せる技術の持主と云ふ事である。日本人の中で最も表情に富めるものは俳優であり、藝妓である。俳優や藝妓が人を魅する樣な笑顏を作るからと云ふて、彼等は倫理上の權威を持つものでない。表情は飾り棚である。倉庫の空虛を巧みに押し隱して、堂々たる大商人に見せる技巧に過ぎない。日本人は表情の拙なるを誇りとせよ、我等が表情を武器とする時が來れば日本は亡びた時である。

倫理の第一義諦は最も大きい勞力を拂ふて、最も少ない効果を甘受する事である。日蓮上人は首の座に押し据へられた時でも、是れ程の喜びを笑へかしと仰せられた。最も少ない感謝の前に最も深い親切を行ふ事すら難しとする所であるのに、大惡無殘の振舞に面して感謝法悅の涙に滿たされ給ふたと云ふ事は、到底常識生活の得て窺知すべからざる至上の境地ではあるまいか。

解脱は法であり、常識は術である。信仰は王であり、官能生活は覇である。

三、

現在の常識を基調とせる生活は概念の生活である。概念生活とは相對生活と云ふ事であつて、例言すれば、善と、惡と、美と、醜とは別の物だと考へて居る生活である。心に絶對を把住し、智情意共に融即して相背かず、渾然として統一されて居る生活には概念生活はない。概念の生活は凡夫の直觀を出發點として、一切の社會現象を批判し進退して行かうとする生活であるが故に百人の凡夫に百色の直觀があり、百色の批判があり、百色の價値認識がある譯である。

絶對生活には一があつて二もなく、又三もない。社會現象に對する絶對的批判は何百人の結論を集めても同一である。何千年を隔てゝも同一である。所謂之れを古今に通じて謬らず、之れを中外に施して悖らざるものだ。近代の倫理が往々にして自我實現を說き、自我の偉大、個性の尊重、己心の絶對を骨張して、凡夫の心性其儘の自由を是認せんとする傾向ある事は、其の外形如何にも普遍的なるが如くにして、實は深淵なる思念を缺ける常識生活、概念生活の所產である。

其の結果は世道人心の頽廢となり、神を忘れ、神を忘るゝが故に自己の神性を虐げ、又は無視し、從つて神の有する特質たる謙遜性、靈妙性、寛恕性、正義性、慈愛性等を滅ぼして行く。常識生活は邪念生活である。常識生活に固定するものは惡魔である。

人或は佛の正覺も凡夫の概念も、共に等しく直觀であるが故に、其の間に本質として差異がない。唯だ前者は高く、後者は低いと云ふに過ぎないのではないかと云ふ。是れは一應尤もに聞ゆる言葉であるけれども、畢竟するに常識の考へ方である。是等の人には孔子と釋迦と、ソクラテスと日蓮と共に程度の違ひであり、五十歩百歩の差であると思つて居るが、絶對と相對とは比較すべからざるが如く、絶對人格と相對人格とは、程度の差ではない事に注意せねばならぬ。

等しきものゝみ等しきものを解する。此の語が正しいものならば、絶對を知るものゝみ絶對人格を理解し得る。若し宇宙に絶對ありとせば、物心兩界を超越し、人生と自然とを統攝し、理想と現實とを融合し、時間と空間とをも一つにしたものでなければ成らぬ。若し眞理が文字や言說の上のみに在り、又人間と離れて存在するものであらば、夫れは恰も水が油の周圍を環流して居ると同じで、何時まで經つても二つの存在であつて、統攝でも、歸一でも、融合でも、超越でも

ない。

人間と眞理と一致する事を即身成佛と云ふ。その之れが一致せざる生活を不統一の生活、又は二元生活と云ふ。畢竟するに水と油との生活である。正邪に分ければ邪道生活、迷悟に約すれば迷界の分齋である。常識生活、概念生活、混在的生活であつて、化合的絶對的の生活ではない。

最高批判よりすれば、佛が獨り悟者正者であり、他の一切衆生は皆迷者邪者である。文底壽量の一義が唯だ絶對眞理であつて、他の法華經（迹門）爾前經、三世諸佛の微塵の經々（基督教、孔子教、モハメット教乃至所有の善惡の論）は、盡く邪見迷見を離れない。迷邪を脱せざれば即ち是れ凡夫生活、阿修羅生活である。法華經壽量品に於いて世尊が『諸々の天人及び阿修羅は』と宣言して、菩薩已下を一刷毛に六凡の中に扱つたのは、即ち絶對教義を顯說せんが爲めの最高批判の前提發揮である。

釋尊の絶對的人格の顯現は、華嚴に非らず、阿含に非らず、乃至般若の時にも非らず、無量義經並に迹門の法華經の會座に來りて、稍々其の片鱗を示せるが如くであるが、日蓮聖人が開目鈔

に示されたるが如く、迹門方便品は一念三千二乘作佛を說き、爾前經の二種の失（とが）の中一つを脱（のが）れたりと雖も、未だ發迹顯本せざれば、まことの一念三千も顯れず、二乘作佛も定まらず、從つて法華經本門の中に於いても、從地涌出品第十五の後半と、壽量品第十六の全部と、分別功德品第十七の前半とに至りて、初めて太陽の出るが如く、赫々として宣示せられたのである。

されば日蓮聖人は、『彼々の經々と法華經と、優劣淺深成佛不成佛を判ぜん時、爾前迹門の釋尊と雖も物の數ならず。いかに況んや其已下の等覺の菩薩をや。まして權宗の者共をや』と眞つ向大上段より妙教の劍を打ち下ろされたのである。絶對人格が釋尊一代に於いて、壽量品の教主たる時に初めて顯現したる如く、絶對教義も亦其際に宣示せられたのであつて、最高批判の立場より之を云はゞ、爾前迹門の釋尊と雖も、尙ほ迷者邪者たるも免れず。況んや文殊をや、彌勒をや、又況んや法華以前の諸經によりて得果得道せる人達をや。

四、

近來產業にもあれ、倫理にもあれ、勿論宗教にもあれ、之れを民衆化せよとの思想要求が擡頭

し初めた。而して其の所謂民衆化に二色あつて、其一つは云ふまでもなく概念的民衆化である。概念的の民衆化は、常識から見た眞理とか幸福とかを人爲的に撒布する事であつて、素より佛陀の大慈悲平等心を中核とせる如き普遍性を有するものではない。其の本質相對なるが故に、其の成果も亦必ずや二元的、混合的に了り、決して化合的、絶對的の民衆化とならない。近代の思潮の傾向が、平等や自由を旗印としながら、著しく自己を骨張し、權利義務を强調し、對立の勢を助長し行くのを見る時、彼等の考へて居る普遍妥當性の內容價値なるものが、絶對的でない事が窺はれると思ふ。彼等の哲學は常識を出發點として居る。

法然上人は偉大な宗教家であつた。當時の頽廢せる舊式佛教の衣を脱いで、階級より信仰を解放し、金襴の袈裟から僧侶を解放せんが爲めに、一鉢一衣の沙門源空として、民衆の大疑の渦の中にまづ自らを解放した人である。併し法然も亦相對界の悟りを出でなかつた。其の墮落せる舊式迷信の佛教に對して革命の法憧を飜し、信心の一路に民衆の歸趣を示し、而かも理深の法を以つて解微(けび)の機根に適せしむべく、念佛易行の一門を開いた功蹟は、彼のルーテルの大偉業にも比すべきものではあるけれども……。

世人或は日蓮上人を以つてルーテルに比する者あれども、吾人は寧ろ法然を以つて之に擬するの適切なるを思はざるを得ない。併し法然の偉業は畢竟するに舊式宗教の打破の爲めに新生命を宣揚したに過ぎなかつた。法然は何處までも相對的の聖者であつたのである。依經の上より之れを見れば、其の經は一乘であるとは云へ、法華以前殊に未顯眞實の分齊であり、其の證果から云ふても未來往生であり、從つて其の信仰と行軌とは一見相即して居るが如く見ゆれども、其の世間面(俗諦門)と、出世間面(眞諦門)との間に眞の融通が出來て居ない。

彼の門徒をして言はしめたなら、法然の教義は立派に佛法即世法に成つて居ると云ふであらう、素よりソウ考へて居なくては成らない。併し乍ら世間法即佛法教に未來成佛教はあり得ない。即ち阿彌陀佛に攝取せらるゝまでもなく、娑婆世界に於いて頓速成佛が出來る譯ではないか。世間法が即ち佛法であるならば、必然の論結として穢土が即ち佛土であり、吾人の濁れる靈肉が此儘佛であらねば成らぬ。もし教理が即身是佛でありとすれば、其の功德も亦即身成佛でなければならず、其の功德が即身成佛なりとすれば、豈敢て十萬億刹を過ぎて遙かに阿彌陀佛に詣至するの

要あらんや。若し娑婆即寂光なりと雖も、娑婆に救主なきが故に、暫らく極樂世界の修行を要するなりと云はば、極樂世界が即ち道場であつて、娑婆世界は豫備門であると云ふ事に成るではないか。

吾人は今茲に淨土門を論究する餘白を持たないが、兎に角法然上人の敎へは、舊佛敎に對峙的に勃興した相對佛敎であつて、其の功德は宗敎の民衆化に在つたけれども、其の敎理功德が迷界の分齊であつたが爲めに、其の行軌と信心と世間の實生活とが即一的に融合しないで、混合的に陷つて仕舞つた。詳しく云はば『信心の上に生活が有つたか、或は信心の間に生活が働らいて居たか』であつた。斷じて生活夫れ自身が信仰其の物では有り得なかつた。法然の頭には生老病死は宿命であるが、日蓮の證りの上には四苦八苦は歡喜其の物であつた。法然は毒を毒として其の口に解毒丸を與へた。日蓮は毒を直に藥と轉活した。かるが故に法然の民衆化は混合的、相對的であり、其の信仰からは權利義務的思想を誘ひ出さざるを得ない。近來思想の動搖につれて、淨土門の敎へが著しく流行し出し、耶蘇敎と共に滔々たる勢を成し來つたのは、即ち夫れが權利思想と結合して、之れを助長するに都合がよい敎義であるが故である。

相對的の敎義信仰から平和は生れない。權利義務の思想は必然的に鬪爭を誘起し來たる現在の常識を保存して置いて、其の上に信心を建設する事は、人間の都合の上にはよい事であるかも知れぬが、淨土文明も歡喜法悅の生活も現前しない。生老病死が宿命ならば、官能の發作も亦宿命である。生老病死の苦は常識生活である、官能生活も常識生活である。生老病死が宿命ならば、常識の妄動も宿命である。常識の上に信心を打ち建てるのは、水の上に油を注ぎ込むものである、概念の信念である、混合的民衆化である、眞の絕對ではない。

近來の民衆運動なるものは盡く對抗運動である。佛蘭西革命、ルイブランの革命と其の軌を一にし、其の方向を同ふする。對抗運動は其の名目人類の平等自由にあり、而して其の實は自己の自由の爲に他を壓倒せんとする運動である。自己の不自由の爲めに他の自由を祈求するの思想ではない。小乘運動であつて大乘的でない。鬪爭的であつて平和的でない。基督敎徒と淨土門徒に此の種の選手が多いのは、吾人の所說を裏書きするものではあるまいか。

我が法華經門徒には、果して此の如き信仰者流は無いであらうか。常識から本佛を見、凡眼か

ら日蓮聖人を見、煩惱業障の心境を通して本經祖判を拜讀して居る人達はないか。本妙律師が朝田薩庵に與へた書簡の中に、『自己の心を以つて御書を拜讀するは、即ち御書を削るものだ』と云ふ意味を戒められて有つた。我が同信の友に、己心の刄を以つて御妙判を削つて居る人はないか。自己の人格完成を第二義にして、佛道の廣宣流布が出來ると考へて居る人、本門戒壇の建立には、自己の懺悔滅罪の戒法より生ずるの功德回向力を本とする事に氣付かぬ人、『自己の完成がやがて家庭の完成、家庭の完成がやがて國家の完成であり、即ち三約離謗の大教によりて國家成佛の大願は、先づ一身の謗法を離れる事に繫がるものだ』といふ事を辨へぬ人、獅子は兎を搏つに全力を盡くす、全力を盡くすとは命を懸けるといふ事である。即ち獅子王の如き心を持てるものは、兎を搏つにも命を的とする事、象と鬪ふ場合と同じである。かるが故に小事に對し生命を犧牲にする底の大慈悲心大決定心を有する事が、眞の偉大其の物であつて、國家の仕事には大奮發をするが、個人の完成などは眼中に置かぬと云ふ事を以つて、偉大な思想と考へて居る人は、果してないであらうか。信仰を常識より見、佛陀を現在心より識量して、以つて得たりと考へる人達は法華宗門に名を列らね、日蓮主義の旗下に立つと雖も、爾前迷界の分齋である。相對的常識

的信心の毒流は、足元の日蓮門下に及んで居る。戒愼すべき事だ。

本尊論について

本尊と云ふ事は信仰の出發點であり、歸着點である。本尊が分らぬ信仰は理論上有り得ないと同時に、本尊に迷ふ信仰は極樂に行かずして地獄に墮ちる。

日蓮聖人は開目鈔に於いて『諸宗は本尊に迷へり』と彈呵されて居る。即ち日蓮主義に依らざる本尊觀は本尊に迷へるものであり、從つて理の當然として、皆相率ゐて地獄に墮ちて居ると斷定せねば成らぬ。

然らば本尊が分らぬ信仰は如何か。我宗に於いて本尊義は他宗に於いて大切であるよりも、一層大事な問題であるが故に、古來其の信仰に關する幾多の議論が戰かはされて、蘭菊の美を競ふて居る。近來此の問題が又々擡頭し、本多師の本尊論發表をきつかけにして、田邊善知師の日蓮聖人の本尊論、清水龍山師の本門本尊論と、矢繼早やに戰線が布かれて行つた。さては高田惠忍

師の哲學的の思想文藻を背景とせる唯一神的本尊論や、北尾日大師のや、若人誌上の時友さんの本多師贊成論や、曰く何、曰く何と宗門は今や本尊樣を中心として、天下麻の如く亂れ、正さに戰國亂世の形相を現出して居るのである。

我宗の人達は本尊が分らぬのであらうか、銘々分つて居る積りで居るには相違ないが、コウも議論が多岐に渉り、一致する所を見ないとすると、素人である吾々には尙更分らう筈がない。我宗の人も亦他宗の人達のやうに本尊に迷つて居るのではないか。

諸宗は本尊に惑へりと仰せられた日蓮聖人は、立派に本尊を感得せられたに相違ない。もし日蓮聖人が、果して本尊を理解せられたか否かと云ふ事が分らぬと成つて來ては、吾等は日月を失ひ、父母と別れた樣なものである。

日蓮聖人に本尊が分つて居たか否かは問題でない。只問題であるのは、聖人は『いつ頃から本當の本尊を觀じられたであらうか』と云ふ事である。

何時頃から……此の疑問を解決して行く所に、只今の戰國的本尊論が統一される糸口が現はれ

るのではあるまいかとも思ふ。

叡山は濁れる山也、と喝破せられて東國に歸られ、清澄の山頂旭が森の懸崖に立たれて、太平洋よりさし昇る太陽に向ひ、初めて題目を高唱された其の時からであるであらうか。

夫れとも波瀾重疊の生涯を經歷し、法華經の故、題目の難を體驗せられて行く間に次第に佛性の光を增長し、本地の風光を開顯し、遂に龍の口の大試錬を名殘として轉身せられ、玆に初めて智悲圓成して、確固不拔の本尊觀を感得せられたと見るべきであらうか。

日蓮聖人には罪障があつたか無かつたか、コンナ問題が問題に成つた時代が有つた樣に思ふ。少くとも私はソウ云ふ時代を經過して居る。

聖人には初めから罪障ナンカ無いのだと主張する事も一つの見方で、必らずしも不都合とは云はれぬけれども、私の經驗に於ては夫れは中途半端の時代の考へであつた。

聖人に限つて罪障が無いと云ふ考へ方は、聖人を人間から引き放し、同時に日蓮主義を人間の宗教から除き去る事になる。

コウ云ふ思想を背景にした本尊觀は、キリストのゴッドの如き飛び放れた隔歷の神と成つて仕舞ふ外はない。

果して聖人に罪障はあつた。龍の口の頸の座を中心とせる聖人の幾多の御書に、日蓮の先業を力說せられて居るのが證據だ。

夫れは聖人の謙讓であるなどと僻んではいけない。聖人御一代の活歷史に於いて龍の口の一段は、正に是れ畫龍點睛の一大事の法門である。コノ時コノ場合の大事の御書を、心にも無き先業呼ばはりと、左樣な淺薄な見方をしては、聖人の肉を削り奉るが如き勿體なきわざであらう。

私は斯樣に拜する。日蓮聖人の本尊觀は、聖人の佛性開展に件ふて次第に開展して行き、其の人格の完成によつて完成せられたものである。

この私の斷定に就ては幾多の共鳴者があらうと思ふ。果して然らば、私は素人として目下本尊論を斯樣に一應片付けて置きたい。夫れは私共はまだ小松原へも伊東へも行つては居ない小日蓮である。日蓮主義が事の一念三千であつて、天臺所立の理觀と天淵の相異である以上は、私共は

唯だ伊東小松原から龍の口へと進んで行く所の事行體驗の外、本尊を感得する道は絶對に有り得ない。從つて山に山を重ね、波に波を疊む魔障重疊、波瀾重疊の生活、死身弘法の實證を經ざる本尊論は事の本尊論にはあらずして、矢張り天臺ずりの理觀に墮したのではあるまいか。私は私自らの體驗に照して、斯樣な本尊論を理觀したる事の法門と唱へて居る。

本尊は論じて定め得べきで無い。論じて定まるものは概念のみである。形式のみである。私共は此の意味に於て先輩方の議論に傾聽する。本當の本尊樣は、只私共の血を以つて彩られた體驗の中から創造される外はない。

日蓮聖人の御本尊は、日蓮聖人の御本尊であつて、私の御本尊では有り得ない。私共は日蓮聖人の體驗された御本尊を體驗したいと思ふ計りである。

一秘の法門

一、

三秘五綱と云ふ事は、日蓮主義の大切な教義であり、從つて他の微塵の經典、幾多の宗教と特別に異る處の大精神、大使命、大特色、大力用は皆此の教相の中に含まれ、又此の教義によりて説明する事が出來るのであるが、世の日蓮主義を説くもの其の三秘五綱の大事を知つて、一秘の法門の、更に更に大事である事を言はないのは甚麽した譯であるか。

日蓮主義は三秘の法門であるに相違ないが、尅實して之れを言はゞ、實は一秘の法門であるのである。若し日蓮主義から一秘を閑却して、直ちに三秘を説いたならば、其の人は眞の日蓮主義教徒でない事は勿論である。一秘とは云ふ迄もなく南無妙法蓮華經の七字であり、南無妙法蓮華

經の眞理であり、南無妙法蓮華經の佛陀であり、南無妙法蓮華經の衆生である。南無妙法蓮華經の一秘が、佛陀でもあり、同時に衆生でもあり、眞理でもあり、同時に物質でもある所に不可思議の妙法がある。

勿論、本門の本尊の理解が必要であり、本門の題目の受持が絶對的要件ではある。併し本尊と題目と戒壇とが集合して、一秘の南無妙法蓮華經が出來たのでない事を、しつかりと承知して置かねばならぬ。宇宙は宛ながら南無妙法蓮華經である、有りの儘、つくろはず、いろはず、自然の儘の姿が南無妙法蓮華經である。一秘は雕琢を加へて出來たものではない。人工を經て存するものでもない。改良の餘地もなく變更する事も出來ない。即ち『絶對の有りの儘の天地其の物』『自然其の物』が南無妙法蓮華經である。

南無妙法蓮華經は、見方によりては生命と云ふ事である。宇宙には生命がある。自然は活きて働らいて居る。近來の科學ですら、生物は死せずと云ふ事を發見した程、宇宙は永遠の生である。人が死ぬと云ふ事は、吾等の經驗に於て是れ程顯著な確實なものはない。併し科學者は云ふ、生物は死せずと。然り、人は人として死ぬのである。物として死ぬのではない。人生の一切の現

象を物として見る時は……即ち人として見ず、馬や牛や鳥や魚や木や草や、此の如き特殊な名や形に於て見る事なしに、唯だ物として見る時は、物は決して死なないものである。生物は死せずと云ふ原則の發見は、同時に一切の物は死せずと云ふ事である。死と云ふ事は、實は無い事、嘘の事、架空の事であつて、宇宙の眞實の上には生のみが獨り在るのである。即ち生は實であるが死は虚である。死と云ふは實は死に非らずして、變化と云ふ事に過ぎないのである。科學者は之れを近頃發見したが、佛陀は三千年前に之を證見し、之れを宣教し、日蓮聖人は七百年前に之れを體驗せられて、觀心本尊鈔に草木成佛論を提擧せられた。即ち非情も亦佛性あり、一礫一塵に各一因果ありて、緣了を具足する旨の妙樂大師の說を引用して、一念三千は情、非情に亘ると仰せられたのである。即ち生物は死せず、宇宙は畢竟して一生命なる事を說き示されたものと拜する。

南無妙法蓮華經の一秘が生命であり、宇宙が生きて居るものであり、而して死と云ふ事は或る形から他の形に變ずる事でありとするならば、一秘の本質には變化はなくして、唯だ其の外貌に差別があるに過ぎないと云ふ事になるのである。即ち言ひ換へるならば、宇宙は唯一の生命の變

化の姿であつて、其の變化が空間的にも時間的にも無限の擴がりと連續とを持つて居る事を、本因本果と云ひ、其の因より果に移る時を死と名づくるのであるが故に、仔細に人生を瞶めて行く時は、人の死亡とか、草木の枯死とか云ふ大なる變化の中に於いても、又細胞の分裂とか原形質の代謝とか云ふ樣な小さな因果が、殆んど刹那々々に連續し、其の刹那の間にも更にもつともつと小さい因果が、迚も凡眼凡思の見る事も想像する事も出來ない樣な、急速度で變化して行つて居るのであつて、此の點より考へ來る時は、宇宙は盡く生死の姿であると見られるのである。此の生死の窮りなき因果を、流轉とも有爲とも無常とも云ひ、其の因果が有形無形に差別して現はるゝ相貌を三千世間と云ふのである。

一念三千と云ふ詞を學問上から解釋すれば、管々しい文字を列ねなくてはならぬが、今暫らく以上の說く所によりて之れを云はば、生物は死せず、一切物は死せず、宇宙は即ち唯一の生命其の物である。唯一生命は即ち唯一物質である、生命即物質である。靈即肉である。肉と靈と化合して宇宙が出來たのではなくして、宇宙は宛から唯一其の物である、見方によりては生命其の物である。見方によりては物質其の物であると云ふ邊を稱して一念と云ひ、夫れが刹那々々に變化

し生滅して、現象の上に流轉の因果を示す所を名づけて三千とは云ふのである。

次に南無妙法蓮華經は眞理其の物である。眞理は何人によりて作られたと云ふものではない。夫れは唯だ自然の世界に自然に存在し、いろはず、つくろはず有りの儘の作用に於いて、眞理其の物なのである。眞理は創造さるべきでない、唯だ發見さるべきである。人は好んでよく眞理を說くが、而かも眞理は創作に非らずして發見であると云ふ事は、何人と雖も異論のない所である。假令誤つて自己の創意だと考ふる事無きに非ずとするも、既に自己其の物が或る因果の法則によつて生れ出で、或る變化によりて存在するものであつて、創造されたものでないと云ふ事が分つて來ると云ふと、靈肉即一の見地から、自己の意志とか、感覺とか、直感とか云ふものも、亦創造されたものでなくして、所謂宇宙一靈の緣起せるものである事が分らなければ成らぬと思ふ。

南無妙法蓮華經が生命であり、眞理であり、靈肉即一である事が分ると、今度は南無妙法蓮華經は佛陀其の物である事が容易に分つて來ると思ふ。『佛とは慈悲心是也』と云ふからには、宇宙は自然に大慈悲の存在でなくては成らぬ。『慈なるが故によく勇なり』と云ふからには、宇宙

は宛然として剛健其の物である。眞理は必らずしも冷やかならず、光りに滿ち、歡喜に充ち、而かして智惠に盈ちて、知情意の三面が缺くる事なき圓滿にして、玲瓏なる內容を具備せねば成らぬ。此の意味に於いて佛陀とは眞理身であり、大智惠であり、大生命であり、大圓滿である。かるが故に宇宙は任運に人格の實在であり、而かして夫れがいろはず、つくろはず、有りの儘なるが故に無作の三身とも云ひ、印度に生れて初めて正覺を成ぜられたのではなく、過去無量劫の大昔より常住不滅であるが故に、垂迹の釋尊に簡んで久遠實成の佛とも覺前の佛とも稱し奉るのである。觀心本尊鈔に、佛既に過去にも滅せず、未來にも生ぜずと仰せあるは、即ち一秘の法門より見たる唯一絕對の佛陀の謂であつて、如來壽量品の偈に『方便力を以つての故に滅不滅ありと現ず』とあるのも同じ事の說示である。宇宙は眞理其の物であると云ふ事は、宇宙は唯一物であり、唯一生命であると云ふ事であり、而かして唯一と云ふ觀念を離れずして其儘に宇宙を佛陀其の物と見る時に、其の佛陀は自然の因果の上に現はれたる佛ではなく、因果を發生し來る所の本體である。因果と切り放して考へる事は出來ないが、因果律に支配せらるゝものではない。一念三千と云ふ詞の上では、寧ろ一念であつて三千ではない。因果律に支配せられて生滅する佛、例

へば印度の釋尊でも、智勝佛でも、乃至阿彌陀佛の如き、是等は寧ろ三千の中に攝屬せらるべき現象界の佛陀であるが、こゝに云ふ所の佛陀は是等の現象佛を生滅せしむる本體であり、又單に是等の佛達ばかりではなく、人間でも餓鬼畜生でも、草木昆蟲に至るまでも派生する力であるが故に、正しく之れを說明するならば、三千の因果を包める一念と云ふべきであらう。從つて本體の佛陀は一念にも非らず、又勿論三千にも非らず、一念卽三千であると云ふを正しい見方とせねば成らぬ。開目鈔に『佛も無始の九界に具し、九界も無始の佛界に備はりて眞の十界互具百界千如一念三千なるべし』とあるは、即ち宇宙は宛然として一念三千の當體であると云ふ事であり觀心本尊鈔の末文に『一念三千を識らざるものには佛大慈悲を起して、妙法五字の袋の中に此の珠を包み、末代幼稚の頸に懸けさしむ』とあるのは、南無妙法蓮華經の一秘の內在が、即ち一念三千であると云ふ事であり、此の一念(本佛界)即三千(現象十界)であると云ふ事を、本尊鈔に『佛既に過去にも滅せず、未來にも生ぜず、所化以つて同體也、此れ即ち己心の三千具足三種の世間なり』と示されたのである。

二、

世上の眞理を探求するもの、眞理の字に囚はるゝ爲めに、眞理とは道理であると考へたり、理屈であると速斷したりする。世上の佛を渇仰するもの、佛の相貌に囚はるゝが故に、佛とは凡夫即ち人間とは別物であるときめて仕舞つたりする。哲學が持て囃されて、是れによりて人生の歸結を知る事が出來るものと考ふる人々は、眞理を單なる理であると思ひ誤れる人々である。佛とか神とか云ふものが人間と離れて存在し、之れに熱烈な渇仰を捧げる時には、鯉に向つて麩が投げ與へらるゝ如く、或る種の惠みが來るものと早合點して、盲滅法界に信心を勵む人々は、後者の迷ひを懷ける人々である。

一莖の花も花として之れを見る時は唯一の姿である。色として見、生命として見、形として見、匂ひとして見る時は差別の姿である。若し花の色を論じて其の花を忘れ、其の花を論じて其の色や香りを忘るゝならば、其の人は何れも花を見ず、花を知らざる人である。

佛陀を考ふるに佛陀の端嚴なる姿丈けであつたり、微妙な音聲ばかりであつたり、無限の生命

のみであつたりするのでは、其の人は決して佛陀を見て居るのではない。

佛陀は同時に凡夫であり、同時に永遠の生命であり、同時に大愛であり、同時に妙理であり、同時に活動であり、同時に智惠である。

佛陀は一莖の花の如く唯一其の物であるが、同時に無限なる變化其の物である。佛陀ほど澤山な形を持つものはない。佛陀ほど多くの矛盾を持つものはない。佛陀は世界第一の愚者であると共に、宇宙第一の賢者である。佛陀は世界第一の惡人であると共に、宇宙第一の善人である。觀世音菩薩の三十三身は物かは、妙音菩薩の三十四身も物かは、佛陀の身變は無數不可思議千變萬化である。

佛陀は一である。かるが故に無量差別である。佛陀は無數の矛盾である。かるが故に統一力である。

南無妙法蓮華經とは佛陀と云ふ事である。併しながらこれが爲めに、然らば佛陀は凡夫ではないと速斷して成らないと云ふ事は、曩に述べた通りである。重ねて云ふ、佛は同時に凡夫である。

併し佛が凡夫であると云ふ事は、凡夫が佛であると云ふ事ではない。英雄色を好むと云ふと雖

も、色を好むものは必らずしも英雄ではないと同じである。

『佛既に過去にも滅せず未來にも生ぜず、所化以て同體也』と謂ふ所の所化とは凡夫の事である。佛即凡夫と示された法門である。之れを論釋すれば哲學となり、之を理觀すれば禪となるが、南無妙法蓮華經は理觀で得らるゝものではない。勿論哲學で得らるゝものでもない。或る宗教の如く、情觀して解し得らるゝものでもない。

南無妙法蓮華經は一秘の法門である。之れを理觀すれば理の法門となり情と離れる。之れを情觀すれば理と相乖く。乖離するは相對するが故である。一秘の法門は讀んで字の如く、相對でなく二元でもない。世人動もすれば云ふ。悟れば佛、迷へば凡夫と。悟りとはそも何?、迷ひとはそも何?。

禪門の或る人達は、佛像を燒いて尻をあぶつた。悟れるもの此の如しとせば、此の悟りには敬虔の觀念もなく、嚴肅な姿もない。その人達に云はしむれば相當の言分はあるであらう。併し大聖釋尊は、諸天善神乃至十方三世の佛陀に對して尻を捲つたためしを聞かない。迦葉阿難の徒、舍利

弗目連の徒また此の如し。釋尊の生涯は光明を以つて充たされ、大慈悲を以つて一貫せられ、歡喜と嚴肅との體達であつた。

禪門の悟りは釋尊の悟りではない。南無妙法蓮華經の悟りではない。彼れは恐らくは唯だ理觀の悟りである。吾等は達するに從ふて、愈々益々麗はしき情操と、純なる感激と、敬虔なる相貌と、正しき理解とに滿ち溢れ行く所の悟りを渴仰せんとする。但し法華經の中にも禪はある。禪の中に法華經がない計りだ。

三、

一秘の法門は、理の徹底と情の完成とを同時に要求する。情理は本と一であるからである。南無妙法蓮華經の情は直ちに、南無妙法蓮華經の理であるからである。聖語に曰く『龍水は火より生じ龍火は水より生ず』と、火とは情であり、水とは理である。南無妙法蓮華經の但信口唱、三業受持の功德は、一秘の功德なるが故に、情理即一の完成を實證する。水火の矛盾せる觀念を打ち消すのみならず、善惡の矛盾せる煩惱心を平らげて、唯一菩提心の中に融かし込む。げに不

可思議極まる法門であり、信心であり、實驗ではある。

南無妙法蓮華經が靈肉一致である事は前述の通りである。靈肉一致であるが故に、心の健全が成就する時、身の健全が實證せらるゝ。金剛不壞の妙體と云ふ事は、金剛不壞の妙心に一致して、必らず金剛不壞の妙信より現はれ來るものである。一秘の法門は理論でなく、理觀でないが故に、南無妙法蓮華經の悟りは、其の受持の人の體力によりて象徴せらるゝ事を忘れては成らない。信力強まれば、體力亦從つて強まる。信力は同時に悟力であり、悟力は同時に體力である。一秘の法門は現實の上に理想の相を現ずるが故に、不可思議であり、尊無過上であるのである。

一秘の法門は、常識の法門である。原因から見た常識では無く、結果から回顧した常識である。煩惱の常識でなくして解脱の常識である。人が安穩を欲する時、一秘の法門は、之れに安穩を與ふる事を保證する。人が自由を希ふ時、一秘の法門は、これに自由を與ふる事を保證する。末の露本の雫、後れ先だつ習ひぞと無常迅速の風の前に、袖かき合はす心の惱みにも、一秘の法門は、和らいだ光を投げる。一秘の法門は、人間の常識が求むるものゝ總てを與へるが、求むるものには與へずして、求めざるものにのみ與へらるゝ所に不可思議の味がある。一秘と云ふのは求め

ざる心その物である。求むるが故に顯である、求めざるが故に秘である。

人間は常に安樂を求めてゐる。幾億年間求め求めて來た。求めるは常識であるが、求めて得ざれば結果に於いて斯程偉大な沒常識はない。人類は永劫に渉りて求むる心の常識を大切に抱きかゝへて、沒常識な結果の前に屈從して、しよう事なしに滿足して來た。夫れが餘りに永い經驗であつたが爲めに、人間の心は無常迅速を人生の眞實として觀念する迄に、絶望の悟りに入つて行つた。禪は人間の絶叫が生んだ遁世の微苦笑である。スマトラでは、年老いた親爺を鰐に食はせる習俗があると云ふ。酷い事だと云ふ事莫れ、彼等は代々ソウ云ふ習俗の下に生きて來たのだ。一休の云ひ草では無いけれども、子が親になり、子が親になりするが故に、彼等は老いれば其の親に對して自分がなした通りの報ひを受けるものと悟つて居る。悲慘な絶望的な悟りではあるが、割合平氣で其の運命に從ふ事が出來る。吾等が偶々同じ運命に置かれ、鰐の口で號泣するであらう時、彼等は之れを笑ふであらうが、笑ふが幸福か、泣くが不幸か、笑ひに得る迄に絶望して行つた人の心が幸福なら世に芦原將軍ほど仕合せ者はあるまい。

苦惱を象徴せる暗黑の幕が切り落されて、千劫阿鼻獄の底の土にも赫々たる光明がさす時が來

た。人類の絶望的解脱が妙の一字に蘇り、それは丁度髑髏に注いだ酒の香に、死んだ美人が肉作る如き不思議の世界が現ずべき時が來た。釋尊の出現がそれであり、聖日蓮の出現がそれであり、一秘の法門がそれである。

日蓮主義は三秘五綱の法門であると云ふが、三秘は已に秘ではない。秘と云ふは唯一と云ふ事である。一秘の法門には情と理との差別がない如く、靈と肉との對立がない如く、過去と未來との區別もない。在世の月は今も月、在世の花は今も花、昔の功德は今の功德なりと仰せあるが如く、一秘の法門は、唯だ吾等の眼前に常住不滅の佛の莊嚴界を展げて居る。一切常住の三寶を具したる唯一不可分不思議莊嚴の一佛寶海の大觀を示す。譬へば北斗の其の所に居て衆生の之れに共ふが如く、法界の森羅萬象、有情非情盡く妙法の統一力に攝められ、一切の衆生皆等しく唯一本佛に向つて合掌禮拜せるの妙相を現はす。一秘の法門は開示悟入の法門であり、示敎利喜の法門である。歐米の彼方に過去の人達が、暗黑の幕の中で永劫の苦しき經驗を趁ふて噴火口上に踊り狂ひつゝ、絶望の解脱と煩惱の常識によつて綴られた脚本で、過去の世の悲劇を演じつゝあ

る時、吾等は妙法五字の新々理想に永遠の眠から呼び醒まされて、此の驚くべき普遍的な、常識的な、デモクラチックな、自由平等を中核とした一秘の法門を、廣宣流布して行かねば成らない。

一秘は實は法門ではない、たゞ心である。心が秘密藏である。如來藏である。大千世界である。維摩の方丈の部屋に何千の大衆が入つた樣に、吾が方寸の中に無量世界が存する。人格を離れて妙法はなく一秘もない。眞實は自己である。自己が雜亂するが故に雜亂勸請となり、自己が分裂するが故に宗派の分立となる。佛は唯一つである如く、自己も亦唯一つである。自己が唯一つである如く、宗門は唯一である。日蓮に歸れと云ふ叫びは、日蓮に歸らぬものと反目するの謂ではない。日蓮に歸らぬものを追擊殲滅せんとする心持でもない。一切衆生を平等に愛すべき心に歸る叫びである。一秘の人格には敎導はあるが反抗はない、呵責はあるが憎惡はない。一秘の人格は自己の心の醜惡に對する如く世間の思想の偏傾に對する。自己の罪心に對する呵責の力が懺悔なるが如く、世間の謗法に對する折伏の力も亦懺悔でなくては成らぬ。大懺悔心即大慈悲力、大反省心即大愛心である。

一秘の法門は大懺悔に其中心を置かねば成らぬと思ふ。大懺悔とはメソ〳〵泣く事ではない。或る宗教の人達の様に憤怒しては祈り、愚痴つては悔ひ、毎日々々こんな事計り繰り返して居る様な女々しい、刹那的な、相對的な、生命の短かいものを云ふのではない。大聖人の所謂『おの〳〵思ひ切り給へ、臭き頭を以つて法華經に奉るは砂を黄金に代へ糞を米に商ふが如し』とある その堂々たる男性的の懺悔そのものである。聖祖滅して玆に六百四十餘年、我が妙宗の勝縁に繋がれるもの、各々思ひ切り給への聖訓に感激して、根強き懺悔、斷えざる懺悔、益々進みて益々深き懺悔を持ち續けて行きたいと思ふ。

四、

日蓮門徒に對する非難が種々ある中に殊に著しき點は、大懺悔の力の全く缺けたるには非らずやとさへ思はるゝ事である。人或は懺悔を說くものを目して彼等は耶蘇教ずりに墮せりと攻擊するけれども、懺悔は決して耶蘇教の特有物ではない。天理教にもある。鈴ふり神道にもある。淘宮術にもある。佛教に於いては禪宗にもあり、殊に淨土門にある。懺悔は宗教通有の根本精神で

あるが、其の深さと廣さと强さとに於いて同一ではない。

凡そ宗教の價値は、其の本尊の力に比例する。本尊强ければ信者の信も亦强く、信强きが故に懺悔の力も亦深く强からざるを得ない。大慈悲は大懺悔を本として生れるが故に、大懺悔心なき所に大慈悲の顯現はあり得ない。耶蘇教徒が如何に勇敢に、剛情に、一徹に其の信力を强調し、其の懺悔を告白するとしても、それは唯だ人間としての强さであるに過ぎない。淘宮術や、天理教や、それ等に現はるゝ懺悔も亦同じであると思ふ。日蓮主義の懺悔が特異な內容を有する事は、それが佛の力の表現としての懺悔であるが故である。法門が別頭獨一なるが如く、必然的に懺悔も亦別頭獨一である。法門が佛知見主義であるが如く、懺悔も亦佛知見的である。人間としての懺悔は求道の最初に現はれる。所謂發心の動機としての懺悔即ち是れであるが、彼の光日房御書に『夫れ鍼は水に沈み雨は空にとゞまらず、蟻子を殺せるものは地獄に入り、しかばねを切れるものは惡道を免れず、いかに況んや人身を受けたるものを殺せる人をや。但し大石も海に浮ぶ船の力也。大火を消す事水の用に非らずや。小罪なれども懺悔せざれば惡道を免れず、大罪なれども懺悔すれば罪消ゆ』とあるは入信の動機としての懺悔ではない。滅罪開悟の關鍵としての

懺悔である。

觀普賢經に『一切の業障海は皆妄想より生ず、若し懺悔せんと欲せば端坐して實相を思へ、衆罪は霜露の如し慧日能く消除す、是の故に至心に六情根を懺悔すべし』とあるのは、最初の懺悔に非らずして最後の懺悔である事が其の文意よりよく了解せられる。

日蓮主義に特異な點は、懺悔に發心の懺悔と成道（滅罪）の懺悔とある事であると考へる。發心即ち入信の動機には必らずしも懺悔を必要としない。迷信から入つてもいゝ、利益主義から入つてもいゝ、道德的動機であつてもよい。併し信心の究竟（最後）は必ず大懺悔の感得によつて因身を轉ぜねば成らぬ。若し日蓮主義の信心に懺悔心を控發せないものありとすれば、夫れは決して本化の妙信ではない。

日蓮主義の懺悔は人の懺悔ではなく佛の懺悔である。切言すれば佛陀の威德勢力によつて打ち出されたる感覺である。人間としては如何に努力するも、想像するも、强求するも、推論するも、到底其の一端をだに掴む事の出來ぬ不可思議、玄妙の消息である。かるが故に之れを名づけて佛の懺悔と云ひ、彼の耶蘇教徒等の骨張する懺悔、或ひは悔ひ改めと稱するものと區別する。

日蓮主義者に懺悔を說くものゝ少なきは、彼等の多くに其の體驗なきが故であらう。懺悔は日蓮主義に在りては最も最後の體驗であり、此感覺が一たび決定すれば、即ち衆罪消除して過去身と未來身とが入れ代はる譯であるから、日蓮主義者が此境涯にまで至らぬ事は寧ろ當然であるかも知れぬ。

日蓮聖人が其の懺悔を發表せられたのは龍の口法難の時である。日蓮と云へるものは去年九月十二日子丑の時に龍の口で首を刎ねられて仕舞つた。これは魂魄が佐渡の國へ來てゐるのだと云ふ御消息を拜すると、大聖人の過去が龍口法難を機會として轉身し、佛子として上首上行としての未來身が現じた事がハッキリと分る。釋尊も亦法華經一部八卷に於いては未だ充分に懺悔の大事を說き明かさず、結經たる觀普賢經に來つて初めて徹底せる懺悔滅罪の獅子吼をせられた。

佛陀は八萬四千の法門を收束するに懺悔滅罪の四字を以てした。佛陀の路を辿つて、懺悔の山門につき當らないものは眞の佛子ではない。耶蘇教や、淨土教や、淘宮術の如きは其の出發點に懺悔を條件とするかに見える。時としては夫れが唯一のものであるかも知れないとさへ思はし

める。國家觀や、哲學觀や、現證利益や、倫理的懷疑や、此の如き動因が無量無邊に發心の機會として許さるゝものは恐らくは唯我が日蓮主義あるのみであらう。而して、日蓮主義の特異は其動因が如何なる點にあるに不拘、最後の殿堂は必らず懺悔滅罪の大自覺に存する點である。日蓮聖人轉身の現證を見よ。法華經法門開展の過程を見よ。而して更に、三大秘法抄の御妙判に刮目せよ。佛陀の教義が釋尊出世の本懷たる一乘妙典八卷廿八品の中にも、懺悔の極說は祕くさせ給ひしと見るべき一大事實。聖日蓮の現身證悟の過程に於て、龍口大難の瀨戸端まで懺悔滅罪の大事をば包み給ひ、此法難重疊の事實に面して茫然又愕然大疑湧き起りたる際、其れ等の弟子檀那に惑耳驚心の梵音として初めてこの大事を打明け給へる一大意匠、而して三大秘法抄に於て本門の本尊、本門の題目を說き示され、特に本門の戒壇に關しては、『戒壇とは王法佛法に冥し、佛法王法に合して王臣一同に三秘密の法を持ちて有德王覺德比丘の其乃往を末法濁惡の未來に移さん時、敕宣並に御教書を申し下して、靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべきもの歟、時を待つべきのみ、事の戒法と申すは是也』と宣べて戒壇建立の時未だ至らざる事を明らかにし、次ぎに『三國並に一閻浮提の人、懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王帝釋等も來下

してふみ給ふべき戒壇也』と仰せられあるが故に、此の御妙判より判斷して、一には戒壇建立の時が聖祖滅後の未來である事を教へ、二つには其の戒壇が宇宙の中心たる懺悔滅罪の根本道場たる事を示され給ふたものと拜する結果、本化の妙教に基づける懺悔滅罪の國家的、世間的現證は最も後れて現じ、本化教徒の懺悔滅罪の自覺も、亦容易に發顯せざるものと信解し奉るべき事情とを綜合達觀し來る時、如何に法界の因緣と、佛法の本質とが懺悔滅罪を以つて最後とし、唯だ此一事のみによつて轉迷開悟即身成佛し得るかを知るに足ると思ふ。

五、

世の學者信者の中に或ひは懺悔を以つて女性的、陰性的、退嬰的の如く貶し、直ちに佛陀の大慈大悲に驀進參詣すべきものゝ如く强調するものがあるけれども、之れ甚だしき誤解である。煩惱即菩提、生死即涅槃の法華經ならば、必然的に大懺悔心即大慈悲心の法華經であらねば成らない。若し夫れ懺悔が女性的でありとせば、吾等は聖祖と共に女性的である事を甘受し、釋尊と共なる退嬰を祝福しやう。

要するに二大秘法は已に顯はれたが、他の一大秘法たる本門の戒壇未だ顯はれざるのが現下の世の姿であり、日蓮主義者の信心狀態なのである。達觀的に之れを取扱へば、日蓮主義者に懺悔なき事は、或は法界の因緣であるとも云へる。末法の廣宣流布の過程は未だ龍の口に達して居ない。小松原にも達して居ない。或は伊東にも達して居ないかも知れない程淺墓な程度にある。吾等が目前の時代に對して、懺悔滅罪の戒法を要求するは、時を待つ事を知らざるうつけの徒、背信の輩であるかも知れない。併し時は感應である。數百萬の信者の中に唯一人の私の感覺は、或ひは大海にまじれる一滴の水であるかも知れぬが、昔聞く長者の萬燈貧者の一燈、佛樣の妙教は今も猶昨の如し。在世の月の今も照らす如く、千年の水の今も流るゝ如く、强烈なる一心不亂の信力は、豆の如き燈火をして、天地を吹き捲く劫風にも逆らひ、遂に烈々として閻浮提を光耀する巨火たらしめしその如くに、我が一滴の信心の水も强盛なる憶持不忘の力によりて、軈ては須彌山を打ち越す程の大波瀾とならぬとも限らぬ。

幸にして我が青年僧侶諸君の間に、青年優婆塞諸君の中に、貧者の一燈大海の一滴が次第に其の數を增し來つて、聖祖によりて包み殘されたる第三秘法の建立着手の鐘の音が幽かながら

も鳴り初めた如く感ずるのは、吾等本化教徒の末班に列なるものゝ欣快措く能はざる所である。

包み殘された第三秘法—事の戒法—懺悔滅罪の大事—彼の本尊と題目とに畫龍點睛の妙果を賦與すべき功德の開かるべき時が來た。若し開目抄の聖語を轉用して之れを云ふならば、懺悔滅罪の戒法が顯はれなければ、まことの南無妙法蓮華經は現はれず、二大秘法も定まらず、水中の月を見るが如く、根無し草の波の上に浮べるが如きものである。

懺悔滅罪の事の戒壇の建立は、懺悔滅罪の事の戒法の體驗から初まらねば成らぬ。聖祖の有せらるゝ懺悔は聖祖のものであつて、弟子のものでも檀那のものでもない。本門の戒壇が形式的に敕命によつて建立されたが爲めに、俄かに濁惡の國土が淨められる譯のものではない。形式戒壇の建立が廣宣流布の根本力となるものでもない。若し事の戒法が形式の上で成就するならば、事の一念三千の法門は人格の上の働らきでは無くして、講壇の上の空語になり了るであらう。事の戒法は讀んで字の如く事の戒法である。文字でもなく、議論でもなく、建築物でもなく、紙や板の曼荼羅でもない。吾等は本門の戒壇が懺悔滅罪の戒法なるが故に、之れが建立の基礎を懺悔滅罪の信念人に置かねば成らぬと主張する。本門戒壇の材料は、木や、石や、青銅の類で

はなく、實に懺悔心を有する事日蓮聖人の如き吾等同志の肉體其のものである。眞の意義に於ける人柱、夫れが即ち第三の秘法の打ち建てらるべき材料であらねば成らない。

戒壇建立の大願業に住するの徒は、須からく至心に過去遠々の重罪を懺悔すべし『無始よりこの方』の重罪に目醒めず、自己の淺ましき醜骸に驚かざる輩が百年に渉りて街頭に大聲疾呼するとも、事の戒壇は永久に汝のものとはならないであらう。

吾等は法界に戒壇を建てる前に、我が身の上に之れを築かねば成らぬ。大聖人が龍口法難によりて轉身され、こゝに無始以來の罪障感覺と、之れに對する懺悔の自覺とを發表された如く、吾等も亦此の聖蹟を趁ふて一日も早く龍の口に急がねば成らない。釋尊によりてをしまれ、日蓮聖人によりて秘められた最後の一大事——成佛轉身の關鍵としての懺悔滅罪を駛と握りしめて、多寶佛塔の扉を八文字に開かねば成らぬ時が來た。

吾等が懺悔滅罪の大義を證見した時、吾等の本尊と、題目とは、玆に初めて渾然融合し、恰かも酸素と水素とが相逢ふて水を成ずるが如く、唯一絶對の如來秘密が开處に完成せらるゝのである。

一秘は實は法門ではない。秘密境、不可思議境である。完成せられたる玉の如き人間其物なのである。吾等は一秘の上から顧みて三秘を說き、五綱を說き、法國冥合を說き、立正安國を說きたいが故に、僭越にも先輩同志の諸君子の前に大懺悔心の控發を勸奬し奉るのである。

嚴格の意味に於いて懺悔は一秘でないかも知れぬ。併し大懺悔なき滅罪なく、轉身なく、成佛なしと云ふ事は吾人に於いて鐵案であるが故に、懺悔即一秘、懺悔即南無妙法蓮華經、懺悔即大慈大悲、懺悔即一切種智と斷定するのである。末法無戒の眞義も是より生じ、佛界緣起の正意も是れによりて領解せらるべきものであるが、是等は凡て他日に讓り稿を改めて述べさせて頂かうと思ふ。

昭和五年十月廿一日印刷
昭和五年十月廿五日發行

一秘の法門……奥付

著者　中田驟郎

編輯兼發行者　清水市江尻二六五　今井見壽

印刷人　靜岡市川邊神田町九一　藤本金太郎

發行所　清水市江尻二六五　清見晴明會

不許複製

【非賣品】

——（藤本印刷所印行）——

終